
YUMA (ゆーま) を目指して

沙 亜竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゆーま
YUMAを目指して

【Nコード】

N9803X

【作者名】

沙 亜竜

【あらすじ】

大気汚染や水質汚濁の影響で住める土地が狭くなり、人々は空中に家を建てるようになった。そういった家々に手紙を届ける郵便配達員は、ホウキで空を飛ぶ魔法の仕事となっていた。風間夢愛はそんな郵便配達員に憧れる中学生の女の子。女子魔法部に所属する夢愛と友人の時時ほゆるは、配達員のスカウト実習に参加することになった。ファンタジー系魔法配達員見習いの成長記。

朝っ！

清々しい朝っ！

カーテンを勢いよく引き、まぶしく差し込む朝日を一身に浴びる。

うん、今日もいい天気っ！

カーテンを開けたわたしの目に飛び込んできたのは、まず青空。

そして家、家、家。

正面だけではなく下にも上にも、多くの家々が建ち並ぶ。

そう、上にも下にも。

歴史の教科書なんかだと、地上だけに狭苦しく家が並んでいるよ
うな町並みしか見られないから、昔の人たちには信じられない光景
なのかもしれないけど。

でも、わたしたちにとっては、ごく見慣れた光景。

窓から身乗り出して十メートルくらいは下にある道を見回すと、
見慣れた光景の中に見慣れたふたりの人影を見つける。

「うわっ、来ちゃったよっ！ ふええ、もうこんな時間だったんだ
っ！」

慌ただしく窓から離れ、すぐにパジャマから制服に着替える。

あっ、せめて髪くらいとかさないとっ！

でもあんまり時間もないし、とりあえず大急ぎでセットするしか
ないわっ！

慌てながらカバンをつかんで部屋を飛び出すと、一気に階段を駆

け下りる。

そして玄関にカバンを置き、そのまま洗面所へと駆け込んだわたしは、鏡の前に立って素早く髪にクシを通していく。

こんなもんかな……、うん、よしっ！ 大丈夫っ！

起きるのがいつもギリギリなわたし。

朝ごはんを食べる時間がほとんどないのは、ごく日常のことだった。

それがわかっているお母さんは、素早く食べられる軽い朝ごはんを用意してくれる。

朝ごはんを食べないと頭が働かないから、なるべく食べていきなさいと、お母さんから毎朝のように言われている。

もちろん、もっとゆっくり食べる余裕を持って起きるようにしなさいよと、お小言もちょうだいしながら。

わたしはサンドイッチを頬ばり、ホットミルクをすすってのどに流し込む。

いくら急いでいても、パンをくわえながら家を飛び出したりはしない。お行儀悪いもんね。

……大急ぎでパンを流し込む今のわたしも、決してお行儀がいいとは言えないだろうけど。

ともかく、しっかりと全部飲み込んでから、わたしは席を立った。

「ごちそうさまっ！ 行ってきますっ！」

「もう、朝っぱらから忙しい子ねえ。はいはい、行ってらっしゃい」

文句の言葉を背に受けながら、わたしは玄関へと向かう。

そのまま玄関のエレベーターに乗り込み、地表へと下りていく。

エレベーターから降りると、目の前には、さつき部屋の窓から見えていたあのふたりが並んで待っていた。

「ごめん、お待たせっ！」

「ほんと待ったわよ！ 毎朝毎朝、どうしてこう人を待たせるかな、この子は！」

「ま、いいじゃないか。待つ時間も楽しめばさ」

両手を合わせて謝るわたしに、ふたりは対照的な言葉を向けてくる。

多少のいらつきを含んだ声を投げかけてきた女の子は、時時ときときほゆるちゃん。

小学校五年生からのつき合いだから、今年で四年目の友人だ。

クラスメイトとしても四年目になる彼女。思ったことを素直にぶつけてくれるのは心地よく感じる。

場合によってはちよつと、厳しいっていつか、悲しいっていつか、泣かされちゃうこともあるのだけど……。

ほゆるちゃんとは違って穏やかな口調で語りかけてくれたのは、水玉みずたま現くん。

現くんは、ほゆるちゃんの隣の家に住んでいる。いわゆる幼馴染みってやつね。

小五からほゆるちゃんと仲よしのわたしは、自然と現くんとも仲よくさせてもらっている。

ちよつとおとなしい、というより無気力と表現したほうがいい印象のある現くんは、背が低いのを少しだけ気にしている。

確かにほゆるちゃんと比べると、十センチ近く低いんだけど。

でもいいじゃん。わたしよりは高いわけだし。
そりゃあわたしも、かなり小さいんだけどさ……。

それはともかく、待つ時間も楽しめばいいなんて、現くんはやっぱり優しいなっ！

思わず、にへらへらと緩みきつた顔をしていたのだろう、ほゆるちゃんがジト目でツッコミを入れてきた。

「またそんな、ポケポケ顔しちゃって。あんたってば、ほんとに成長しないわよね！」

そう言い放った彼女の視線はゆっくりと下がり、わたしの胸の辺りで止まる。

「この辺も……」

「う……うるさあ〜いっ！ まだ発展途上だもんっ！ お母さんみたいに控えめなところで止まったりしないんだもんっ！」

「あ〜……。おばさん、確かに小さいよね。なんだ、止まっちゃうのが目に見えてるじゃないの」

「失礼な〜！ 目に見えてないもんっ！」

「ふたりとも、充分失礼だよ、おばさんに……」

わたしとほゆるちゃんの言い争いに、現くんは落ち着いた声を挟む。

そして、

「ま、とにかくさ、そろそろ学校に向かわない？」

と続けた。

「あ……」

「ぎゃゝす！ もうこんな時間じゃない！ また遅刻しちゃうわ！

……」

「ほゆるに言われるとは思わなかったな」

「っていつか、走らないとっ！」

「くゝ！ 早く自分のホウキが欲しいわ！」

朝。

清々しい朝。

騒がしい三人組が慌ただしく足音を響かせるこんな光景も、ご近所ではすっかりお馴染みとなっていた。

どうでもいいけど、ぎゃゝすって叫び方はどうかと思うな、ほゆるちゃん……。

大気汚染とか水質汚濁とかの影響で、人が住める場所が極端に少なくなつてから久しい今の世の中。

人が住んでいるのは、大きな都市の近辺など、整備の行き届いた一部の地域だけとなっている。

もちろんそれは、わたしたちの住む日本だけじゃなく、世界中のどこでも同じ。

海は汚れ、大地は腐ってしまった。

地球規模の自然破壊。すべての生物にとっての危機。

その原因となつたのがわたしたち人間なのは、紛れもない事実だけれど。

したたかな人間は、その危機をも乗り越え、こうしてのうのと生き長らえている。

そりゃあそうだよね。いくら自分たちが原因だからって、じゃあ責任を取って絶滅します、なんてことを考えるわけがない。

どんな生物だって、生きること**に**必死なんだから。人間だって、例外じゃないのだ。

住む土地が少なくなつたなら、空に住めばいい。そう考え、家々は上空にも建てられるようになった。

家の重さに耐えられる頑丈な柱　家柱いえはしらを地表に立て、その上に家を建てる。家柱の中にはエレベーターが通っていて、それを使って地表とのあいだを行き来する。

それが、一般的な空中住宅だ。

頑丈な柱が必要だったり、強風に負けないよう家自体にも補強が必要だったりするから、地表に建てる家よりはお金もかかってしま
うみたいだけど。

土地の値段がバカ高い昨今、比較してみれば空中住宅のほうがり
ーズナブルと言える。

もちろん空中だからといって、勝手にどこにでも家が建てられる
ってわけじゃないけど、それでも空中の値段のほうが、土地の値段
と比べたら圧倒的に安い。

というわけで、町には空中住宅が多くなっている。

空中に住む人が多いと、当然ながら移動手段も空中を使いたいと
ころだけど、そう簡単にはいかない。

実際、普通に道路を走る車以外に、魔力を使って空を飛べる車も
あるにはある。だけど、とつても高価な上、免許の取得も難しい。
もう少し簡単に扱える乗り物として、魔法のホウキもあるのだけ
ど。

こちらもそれなりに値が張る上、やっぱり免許が必要となってい
るため、なかなか簡単には乗れない。

そもそも、魔力を持っている人自体が少ないわけだし、そういつ
た魔力が必要な移動手段なんて普通の人には使えないのが実情だっ
たりするんだよね。

わたしは風間夢愛。
かほまのゆあい

友達のほゆるちゃんや現くんと一緒に、我が校伝統の女子魔道部に所属する、ごくごく普通の中学二年生。

魔力を持つのは、古来より女性に多い。

そのため、女子魔道部は伝統となっている学校も多いのだ。

反対に男子魔道部がある学校は少ないのだけど。うちの学校にもないしね。

伝統となっている部のわりに、部員は少なく、二年生はわたしたち三人だけ。

一年生がふたり、そして三年生に至ってはたったひとりと、寂しいものだったりする。

それは、女子の入部が魔力保持者に限られているためだ。

魔道部の主な活動は、学校所有のホウキに乗って飛行演技をすること。だから、魔力がなくちゃ話にならない。

それじゃあ現くんはどうかというと、実は彼には魔力がない。現くんは、マネージャーだから、魔力がなくても問題ないのだ。

人数も少ないこんな部に、マネージャーなんて必要なのかな？と思わなくもない。だいたい、過去にマネージャーがいたことなんて、ほとんどなかったみたいだし。

でも現くんは、ほゆるちゃんが部長さんに強く推薦し、異例の抜擢と相成った。

わたしとしても、それは嬉しいことだったのだけど。

「ほゆる〜！ 夢愛ちゃん〜！ 頑張れ〜！」

両足を揃えてホウキに横座りし、校庭を地面すれすれで飛ぶ「走り込み」をしているわたしたちに、応援の声を向けてくれる現くん。

どうしてチアガールみたいなポンポンを持って、そんなにも嬉しそうに応援しているのかは、謎だけど。

というか、一年生のふたりや部長さんも同じように飛んでいるのに、わたしとほゆるちゃんだけを応援するなんて。

特例という感じで入部を許可されたわけだから、現くん以外にマネージャーはいない。

だから現くんは、みんなのマネージャーってことになるはずなのに。

もちろん、特別に扱ってもらえるのは嬉しいし、できたらほゆるちゃんとまとめてじゃなくて、わたしだけを特別に思っただけほしいのだけど……。

「ほゆる、やっぱり恥ずかしいよ。やめていいかな？」

「ダメよ！ チアガールの衣装を着るのは妥協してあげたんだから、しっかり応援しなさい！」

……あのポンポン、渡したのってほゆるちゃんだったんだ。

っていうか、現くんがチアガールの衣装まで着させるつもりだったの？

ほゆるちゃん……、恐ろしい子……。

だけど、

ちよつと見たかったかも……。

思わず想像して、顔を赤らめる。

そ、それはいいとしてっ！

やっぱりほゆるちゃんと現くんは、仲がいいんだなあ。

幼馴染みだもんね。わたしが入り込むすき間なんて、ふたりのあいだにはないんだ。

ちょっとブルーになっているわたしに、

「ほら、現が応援してるわよ？ 頑張って飛びな！」

ほゆるちゃんはそう言って笑顔を向けてくれた。

「みんな、お疲れ様〜！」

走り込みのあと、続けてスピード飛び、高飛びなどの練習をして、今日の部活動は終了となった。

わたしたちよりもひと足先にすべての練習をこなし、「待ち」に入っていた部長さんから労いの言葉がかかる。

女子魔道部の部長、くぬぎさやうえ 柵笹枝先輩はメガネで三つ編みの優等生。

進学希望の先輩はそろそろ受験勉強に入らなければならぬはずなのに、毎日部活に顔を出してわたしたちを指導してくれる。

伝統ある女子魔道部を本当に誇りに思っているらしく、わたしたちを立派に育ててからじゃなければ引退なんてできないと、口々に言っていたりする。

だからわたしたちは、頑張って早く一人前にならないと、先輩の進学の妨げになってしまうかもしれないのだ。

『お疲れ様〜！』

わたし以下、部員たち四名が声を揃えて答えると、すかさず現くんがタオルを持ってきてくれた。

ほゆるちゃんにタオルを渡したあと、現くんはわたしの目の前に立つ。

「はい、夢愛ちゃん。お疲れ様」

「あ……ありがとう、現くんっ！」

息は上がっていたけど、元気にタオルを受け取るわたし。その手が、なにやらふさふさした物体に触れた。

な……なんで現くんは、応援に使ってたポンポンをつけたままなの？

……気に入っちゃったのかな？

そんなわたしの疑問は、顔から溢れ出ていたみたいで。

「これはさ、ほゆるがきつく手に縛りつけちゃって、ほどけないんだよね。今タオルを渡したときにも引っ張られたから、余計にきつくなっちゃったし」

自嘲気味にそう答えてくれた。

「あははっ、そうなんだっ！ ……って、現くん大変っ！ 強く縛りすぎだよこれっ！ 手が紫色になっちゃってるよっ！？」

「あっ、ほんとだ……。ごめん、両手がこの状態だから、ほどいてくれる？」

「もちろんですよ！ まったくもう、ほゆるちゃってば、ひどいんだから……。あれっ？ ここが、こっになって、こっちが……」

わたしは紫色っぽくなっている現くんの両手を取り、巻きついているヒモをほどこうと躍起になっていたのだけだ。

「あれ、あれれ、あれれ？」

ヒモはどんどん絡まるばかり。

「あれえ〜っ？ こっちがこっで、う〜んと、え〜っと……。どうしてえ〜！？」

「どうして〜は、こっちのセリフよ！ あんたはどこまで不器用な

「のよ！ ときなさい！」
「はづっ！」

ほどこどころか、余計にひどくしてしまったわたしを突き飛ばすようにどかし、ほゆるちゃんが役目を引き継ぐ。

彼女がするするとヒモを引いたり巻いたりしていると、あつという間に現くんの両手は自由を取り戻していた。

「ふう、よかった。ちぎれちゃうかと思ったよ」

「あつづ、現くん、ほんとごめんねっ！」

情けなくてシユンとしながらも謝っていると、ほゆるちゃんがひと言。

「まったく。あたしがいなかったら、どうなってたことが」

……だつて。

ひどいよねえ？

現くんを最終的に助けたのは、確かにほゆるちゃんだけだ。

「あなたがそもそもの原因でしょう？」

うんうん、まったくもって、そのとおり。

と、わたしが思わず頷く言葉をほゆるちゃんに向けたのは、もちろん笹枝先輩だった。

落ち着いた雰囲気ながら、部長としての威厳からなのか、その声は鋭く響いてくるようにすら感じられた。

そんな笹枝先輩からのツッコミを、ほゆるちゃんはするりとかわす。

「確かに原因はあたしかもしれませんが、それをひどい状態にしたのは夢愛です。だいたい現だって、自分でどここうと思えばほどける状態だったと思いますよ?」

「なるほど。つまり自分は悪くない、と?」

ギリリ。

メガネの奥で笹枝先輩の目が光ったように見えたのは、はたしてわたしの気のせいだっただろうか。

「う……。すみません、イタズラ半分でした」

さすがのほゆるちゃんも、笹枝先輩には逆らえない。あっさりと頭を下げる。

「素直でよろしい」

それを受けて、笹枝先輩は満足そうに頷く。

ただ、ほゆるちゃんのほうは、

「……………なによ、……………のために、あたしがせつかく……………」

とかなんとか、ブツブツとつぶやきながら、なぜかわたしのほうに不満そうな視線を向けていた。

中庭の奥に建てられた部室棟。そこにある女子魔道部の部室に、練習を終えたわたしたちは戻ってきた。

まずはマネージャーである現くんにはホウキを渡し、女性陣が先に部室へと入る。

制服に着替えるためだ。

ホウキに乗って飛ぶときには、魔女服というのを着ている。

魔女服とはいっても、お話の中に出てくるような、黒い三角帽子とローブといった地味なものではない。

白を基調とした清潔感のあるワンピースタイプで、長いスカートがヒラヒラ感を演出する、優雅な雰囲気を持った衣装になっている。

魔道の飛行演技には、優雅さも求められるため、ゆったり飛ぶのが基本となっているのだ。

わたしたちが着替えているあいだ、部室の外にいる現くんには、魔法のホウキの汚れを落としたり毛並みを整えたりといった手入れをしてもらう。

マネージャーの仕事内容は、笹枝先輩が決めていた。

まず、部費で購入している学生用の魔法のホウキの手入れと管理。それと、わたしたちが着る魔女服、これも部費で購入したものだけど、その管理と洗濯もマネージャーの仕事となる。

全員が着替え終わると、笹枝先輩が現くんを呼ぶ。

現くんは魔法のホウキを部室に持ち込んで、ロッカーにしまう。

部室の中ではわたしたちが、脱いだばかりの魔女服を現くんに手渡ししていく。

それを外にある水飲み場まで行って洗ってくるのも、マネージャーである現くんの仕事だ。

冬場なんかはあまり汚れないから頻繁に洗ったりはしないけど、そろそろ夏も近いから、ここところ毎日洗ってもらっている。

……使っている本人が持ち帰って、家で洗ってくればいいのでは。

わたしはそう思ったのだけど、「マネージャーとしての仕事だから、現くんが全員の魔女服を手洗いするのよ」というのが笹枝先輩の主張だった。

もちろん部長命令は絶対だから、誰も逆らえない。

現くんが魔女服を洗って持ち帰ってくるまでのあいだ、残ったわたしたちは部室でお喋りタイムとなる。

「練習は終わってるんだから、帰ったっていいんじゃないですか？」

一年生からそんな声も上がったけど、笹枝先輩いわく、「マネージャーに洗濯させておいて帰るなんて、そんな薄情なマネはできないわ」とのこと。

……だったら洗濯を手伝ったらいいんじゃない、という言葉は呑み込んでおく。

だって絶対、「マネージャーの仕事なんだから、ひとりではらなきゃダメなのよ」とかって答えが返ってくるに決まってるし。

わたしたちがしばらくのあいだ他愛ないお喋りに花を咲かせていると、現くんが洗い終えた魔女服を持って帰ってきた。

それを部室の中に干して、今日の部活動は終了、解散となる。

部室にカギをかけ、それぞれの帰途に向かった。

わたしはいつも、家までほゆるちゃんと現くんのふたりと一緒に帰っている。

「また明日ねっ！」

家に着いたわたしは、家柱のエレベーター前でふたりと挨拶を交わす。

そして、並んで小さくなっていくふたつの背中を、じっと見送った。

毎日思っていることだけど、

ちよつと、寂しいな……。

夏も近づいているとはいえ、なんだか妙に涼しい夕方の風が、わたしの心のすき間をすり抜けていく。

ぶるる。

微かに体が震える。

気づけばもう、ふたりの姿は見えなくなっていた。

ふう……。

わたしはわずかにチクチクと痛む胸を押さえながら、エレベーターの上昇ボタンを押した。

七月に入ってから少し経つと、期末テストがある。テスト期間中は部活動が禁止となるため、わたしたちは放課後になつてすぐ、学校をあとにした。

本来ならまっすぐ帰ってテスト勉強をしなきゃいけないところだけど。

気分転換も兼ねてちよつと寄り道していこう、という話になり、よく足を運んでいる公園へと向かうことにした。

ベンチがいくつか設置されているだけで、他にはちよつとした植え込みや芝生がちらほらある程度の、なんだかとっても寂しい公園。せめて噴水とか花時計とかでもあればいいのに、と思ってしまうけど。

でもここは、わたしにとってはお気に入りの場所。訪れる人も少ないから、静かで落ち着ける憩いの場になっているのだ。

気持ちが沈んだりしたときにも、よくこの公園に来ていたっけ。公園自体が温かく、わたしを包み込んでくれるような、そんな気がするから。

ほゆるちゃんたちに出会ってから、それほど頻繁にっわけじゃないけど、何度も来ているこの場所。

毎回ふたりと一緒に楽しい時間を過ごす、くつろぎの空間。

最後に来たのは、二週間くらい前だったかな？

そんなことを考えているうちに、爽やかな緑色が目にも心にも優

しい公園の姿が目飛び込んでくる。

今日はやけに暑いから、途中でソフトクリームを買ってきてあった。

公園の中に足を踏み入れたわたしたちは、いつもどおり並んでベンチに腰をかけた。

このベンチに座るときの並び順は、わたしが真ん中で、ほゆるちゃん和現くんがその両隣、っていうのがお決まりのパターンになっている。

いつからそうなったのかは、ちょっと覚えていない。

確かふたりと知り合った当初は、ほゆるちゃんと現くんが隣り合っ
って座っていたと思うのだけど……。

「それにしても、あつついわね、今日は！」

「ほんとだねっ！　アイスが美味しいよっ！」

ほゆるちゃんの大声に、わたしも負けじと明るい声を返す。

汗はただらと流れてしまうけど、その分ソフトクリームの冷たさが心地よくて、とっても美味しく味わうことができていたから。

「そうだね、やっぱり夏はアイスが一番だよね」

わたしの言葉に、現くんも頷いてくれる。

でも、ほゆるちゃんだけは、汗だけじゃなくなって文句もたららると垂れ流し続けていた。

「どうしてあんなたちはそう、ポジティブシンキングかなあ！　あ
くもう、暑くてベトベトで気持ち悪い！　スカートがまとわりついて、鬱陶しいっ
たらないわ！」

わーわーと喚きながら、ほゆるちゃんはスカートの裾を両手でつかみ、大きくあおぐようにして足に風を送っている。

「……ほゆるちゃん、お行儀悪いよお？　っていうか、パンツ見えちゃうっ！」

「うるさいわね！　そんなことより、汗でベタベタなほうが大問題なのよ！」

「ええっ？　パンツ見えちゃうほうが、問題だと思うけどなあ……」

「あたしはあんたと違って、汚くないから大丈夫なのよ！」

「わ……わたしだってべつに、汚くなんてないよおっ！」

「だったら現に確認してもらえば？」

「な……、どうして現くん！？　そんなの無理っ！」

わたしとほゆるちゃんが、こんなことを言い合っているあいだ、当の現くんは涼しい顔でソフトクリームを舐め続けていた。

……なんていうか、ちょっと恥ずかしいけど、こっぴつ話題なら男の子なんだし、少しくらい興味を持ってもいいんじゃない？

そりゃあ、あまり積極的に食いついてこられても、嫌ではあるのだけど……。

でも現くんは、まったく興味なしと言わんばかりの澄まし顔でソフトクリームに夢中の様子。クリーム部分は食べ終えて、パリパリと音を立てながら残りのコーンをたいらげているところだった。

ほゆるちゃんといつも一緒にいるけど、女の子として意識しているような感じでもないし……。

もしかして現くん、女の子に興味なかったりするのかな……？　ぼーっとしていたからか、わたしは手もとから溶けたソフトクリ

ームが垂れてきていることに、まったく気づかなかった。

「あっ！」

と思ったときにはもう遅い。

溶けたソフトクリームの雫は、コーンから指を伝って、そのまま制服のスカートに落ちる。

「大丈夫？」

すかさず現くんがハンカチを取り出すと、スカートに落ちたソフトクリームを拭き取ってくれた。

「すぐに拭かないと、シミが残っちゃうからね」

「あ……ありがとう」

至近距離に現くんの顔があって、わたしは赤くなりながらお礼を述べる。

そんな状態なのに現くんのほうは、微かに笑顔を浮かべながらも、やっぱり澄ました様子。

どう考えても、意識されてなさそうだなって感じは否めない。

もう少しこう、トキメキとかがあってもバチは当たらないと思うのだけど。

……ま、それも現くんらしいところだし、べつにいいけどさっ。

心の中で弁解(?)の言葉を叫び、わたしがひとり頬を赤く染めていた、そのとき。

「あっ、夢愛、見て！」

「ふえっ？」

不意にかけられた、ほゆるちゃんからの言葉に、わたしは首をかしげる。

「……上よ、上！」

「あつ、郵便屋さん！」

そう、わたしたちの目に飛びこんできたのは、優雅に空を舞う郵便屋さん　郵便配達員さんの姿だった。

郵便物の配達先となる家々は、空中住宅であることが圧倒的に多い。そのため、郵便局の配達員さんたちは、魔法のホウキに乗って空を飛ぶ。

だから女の子の憧れの職業なのだ。

もちろん魔力がないと務まらない上、人気も高いからそう簡単にはなれない。

だけど、カッコいいし綺麗だし、わたしたちみたいな魔道部に所属している子にとっては、目標ともいうべき存在だった。

「はう、やっぱりカッコいいよー！」

「そうね。優雅だし、今どき手紙を届けるってのも、夢があっついわよね！」

わたしとほゆるちゃんは両手を合わせ、上空を横切っていく郵便屋さんにキラキラした眼差しを送る。

そしてその姿が視界から消えるまで、憧れの吐息をこぼしながら見つめ続けていた。

テスト期間が終わると、部活動の禁止期間も終わる。
というわけで、わたしたちは夏休み前の暑い中、練習を続けていた。

……ちなみに、テストの結果については聞かないでお願いしたい。

一応、赤点 補習の最強コンボは免れた、とだけ言っておくけど。
わたしたち魔道部の女子は、みんな漏れなく郵便配達員に憧れている。

中学生を対象とした飛行演技の大会が毎年秋に催されるので、そのための練習も欠かさない。

そういった大会で目覚ましい活躍をした生徒が、郵便局のお偉いさんに目をつけられてスカウトされる、というケースもあるわけだから、必死になるのも当然と言えるだろう。

夏休み中の部活動は基本的に自由となっではいるけど、大会のある部活はみんな、毎日遅くまで活動するのが普通だった。

わたしたち女子魔道部もご多分に漏れず、毎年夏休みも活動する。しかも、休みに入る前と同じどころか、土日も含めて毎日の活動となるのだ。

「こらそこ！ 気合いが足りないぞー！」

「は……はいっ！」

笹枝先輩からの叱責を受けながら、必死に飛び続けるわたし。
七月も終わりが近くなってくると、ただじっとしているだけでも

汗が止め処なく流れ出る。ましてや魔力をコントロールしながら空を飛んでいたら、まさに滝のような汗と言っても過言ではないくらい。

でも、そんな汗をもある程度コントロールできるようにならないと、一人前の郵便配達員にはなれないらしい。

確かに、たとえ優雅な飛び方をしていても、汗だくだったら見ているほうも暑苦しく感じてしまうもんね。

実際には、真夏だと仕方がないと考えられている部分もあって、飛行演技の大会は秋頃に行われることが多いのだけだ。

とにかくわたしたちは、ひたすら魔法のホウキを操り、空を駆る。優雅な飛び方をしながらも、速さを兼ね備えるのが優秀とされているため、魔道部のメンバーはこつやつて日々練習に明け暮れるのだった。

「みんな、頑張れ！」

現くんがあんな必死に応援してくれるのは、大会とかそういうのとは関係ないと思うけど。

きつと、ほゆるちゃんか笹枝先輩から、「ごちゃごちゃと言われたんだろっな。」

しっかり応援しないと、チアガールの衣装が待ってるぞ、とか。

それはともかく。

「二年生のふたり！ 一年生の勢いに負けてる場合じゃないでしょ！ もっとしっかり飛びなさい！」

『はいっ！』

笹枝先輩からの怒声に、わたしとほゆるちゃんは素直に返事をす
る。

もちろん、先輩の言うとおりだというのもあるのだけど。

笹枝先輩はただ怒鳴って先輩風を吹かせているわけじゃない。

わたしたちと一緒に空を飛びながら、なおかつ、わたした
ち部員四人の練習をしっかりと見てくれているのだ。

先輩の実力は折り紙つきで、指摘も的確だから、反論する余地な
んでない。だから一年生のふたりもわたしたち二年生も、笹枝先輩
には絶大な信頼を置いていた。

笹枝先輩の実力がすごいという点については、のちのち語るとし
て。

わたしたちは先輩の指導のもと、必死に頑張っている。

なかなか思うように大空を飛び回ったりはできないけど、どんど
ん上達していることは実感できた。

「慣れればそれだけコントロールしやすくなる。それだけのことよ。
要は本人のやる気次第なの」

笹枝先輩は謙遜してそう言うけど、彼女の教え方が上手いからと
いう要因もあるのは間違いない。

「こら、足はちゃんと揃えなさい！ それから横乗りのときは、ホ
ウキをぎゅっと握るんじゃないで、そつと手を添えるくらいにして
おくこと！ そっじゃないと優雅さが半減しちゃうでしょ！？」
「はい、わかりました！」

先輩の声が響くと、残りの四人の声も響く。

ギリギリとした強烈な日差しに照らされた校庭の上空で、わたしたちの練習は続いた。

わたしたちが飛んでいる下では、運動部の学生たちがそれぞれの練習を繰り返している。

魔女服は長いスカートになっていているわけだけど。横乗りで足を揃え、優雅に飛んでいけば、下着を見られたりなんてこともない。

もっとも、どの部活も大会とかに向けて練習中なのだから、ぼへーっと空を見上げているような余裕なんてないだろうけど。

ただ、たまに野球部のホームランボールなんか飛んでくるのは注意しなきゃいけない。

当たったら痛いだけじゃなくて、きつとそのまま校庭まで真逆さま。スカートがはだけてしまふとかそういうレベルではなく、下手をしたら骨折程度では済まないなんて事態も……。

空を飛ぶってというのは危険と隣り合わせなのだということも、忘れてはいけない注意事項のひとつだった。

わたしとしては、できれば綺麗な景色をゆっくりと眺めながら、ゆったりまったり空の散歩を楽しみたいな、なんて思っているのだけど。

飛行演技の大会とかだと、そうも言っていられない。

優雅さも評価のポイントではあるものの、あくまで飛行競争ってことになるのだから。

うん、頑張ろうっ！

「みんな〜！ ファイト〜！」

気合いを入れて飛んでいるわたしのもとに、ポンポンを振りながら応援する現くんの爽やかな声が届く。

普段はなんだか無気力な感じなのに、なぜかとってもノリノリで元気な現くんの声は、わたしの耳に心地よく響いていた。

暑さを振りまき続けていた太陽が徐々にその高度を下げ、赤味を帯び始めた頃、ようやく今日の練習は終わりを告げる。

いつもどおり部室に戻り、マネージャーの現くんが魔女服の洗濯を終えるのを待つあいだお喋りを楽しみ、現くんが帰ってくると今日の部活はお開きとなった。

と、いつもならさよならの挨拶をして、みんなそれぞれ帰っていくのだけど。

「あっ、そうだ。二年生の三人は、このあと少し残ってて。話があるの」

今日の笹枝先輩は、メガネの位置を直しながら、落ち着いた声でそう言った。

二年生の三人が残って、話をする笹枝先輩も残るとなると、すぐに帰れるのは一年生のふたりだけ。

というわけで、一年生のふたりが部室から出ていくのを見送ったあと、ドアを閉めた笹枝先輩は、わたしたち三人に向き直った。

「さて、あなたたちに伝えることがあるの」

そう切り出した先輩は、なんだかとっても嬉しそうな笑みを浮かべていた。

「ええっ！？ 本当ですかっ！？」

笹枝先輩から伝えられた内容に、思わず声も裏返ってしまつくり、わたしのテンションは上がりまくった。

「ええ、本当よ。郵便局から、スカウト実習への参加願いが届いたの」

わたしたち女子魔道部の憧れ、郵便配達員はとても人気のある職業ではあるけど、魔力がないとなれない特殊な仕事。

だからこそ、学生のうちから目をつけておこうと、スカウト実習という制度を設けている。

うちの学校の女子魔道部は、長い歴史のある由緒正しい部ではあるけど、それでもスカウト実習の参加願いが来るのは、数年に一度あるかないかといった程度らしい。

スカウト実習は夏休み中の二週間で行われる。そして去年、笹枝先輩はそのスカウト実習を受け、見事合格した。

だからわたしは、先輩の実力は折り紙つきと言ったのだ。

最終的には進学を希望するってことで、卒業後の採用内定はお断りしていたけど。わたしとほゆるちゃんも去年その話を聞いて、なんでもつたいたいことを、と憤慨したものだ。

でも、まさか二年連続でスカウト実習に参加できる部員が出るなんて。

スカウト実習の参加願いが来るのは、二年生に対してだけと決ま

っている。

一年生だとまだ経験不足だし、実習は夏休みに行われるため、三年生だと受験勉強で参加できない可能性もあるからとのこと。

実習の参加者は、実際に郵便局の人がお忍びで部活の様子を見学し、顧問の先生や部長さんからも話を聞いた上で決められるらしい。

だから、選ばれたのが誰なのかは決まっているも同然だった。

「よかったねっ、ほゆるちゃんっ！」

わたしはほゆるちゃんの手を取って自分のことのように喜んだ。

ほゆるちゃんの飛行技術は、友達のわたしから見てもすごいと思う。

それに比べてわたしのほうは、まだまだ基本もできていないくらいで、空を飛んでいてもバランスを崩すことが多い。

二年生の部員にはもうひとり、現くんもいるわけだけど。

魔力を持つのは女性が圧倒的に多いためか、郵便配達員は女性の仕事となっている。

だから男性である現くんにはスカウト実習の参加願いが来るはずはないのだ。

わたしが歓喜の声を上げながら、握ったほゆるちゃんの両手をブンブン振って喜びを表現する目の前で、彼女は戸惑ったような顔をしていた。

「な……なに言ってるのよ！ あんたかもしれないじゃないの！」

「えっっ？ そんなのありえないもんっ！ わたしって、ドジだしノロマだしっ！」

「……確かにドジでノロマだけど……それでも、可能性はあるじゃ

ない！」

……やっぱり、ドジでノロマだったのは否定されないんだ……。ちよつと悲しく思いつつも、わたしはすぐさま反論する。

「可能性なんてないよっ！ だって、ほゆるちゃんと比べたら、どう考えてもわたしのほうが劣るもんっ！ だから選ばれたのはほゆるちゃんて決まりっ！ ……ねっ、笹枝先輩、そうでしょ？」

わたしの言葉に、笹枝先輩は笑顔のまま答えてくれた。

「そうね。ほゆるさんには、スカウト実習に行ってもらっわ。もちろん、本人が拒否しなければだけど」

ほらやっぱり、ほゆるちゃんだ。

だけどちよつと、残念さで心がチクリと痛む。

「拒否なんてするわけないよっ！ ね？ ほゆるちゃんっ！」

まだ戸惑った表情を浮かべたままのほゆるちゃんに代わって、わたしが勢いよく答える。

でしゃばりかもしれないとは思ってたけど、断るなんてこと、あるはずないもん。

「もちろんよ！ あたしなんかでよければ、喜んでスカウト実習に参加させてもらいます！」

わたしの勢いにつられたのか、ほゆるちゃんは明るい声で、しっかり自分の口から先輩に向けて答えを返していた。

彼女は夏休み中に二週間、泊まり込みとかではないけど、土日を除いた平日には毎日郵便局に行って実習を受けることになる。

わたしはわたしで、夏休み中の部活を頑張ろう。

ちよっと離れてしまうけど、わたしはほゆるちゃんを一生懸命応援しようと、心に決めていた。

と、不意に笹枝先輩がわたしの方に顔を向けると、こう言った。

「それじゃあ、ふたりとも頑張つてね！」

……………えっ？

驚きで目が丸くなるわたし。

「どどどどどどど、どついうことですかっ!？」

思わずどもった声になりながらも、笹枝先輩に質問をぶつける。

「どついうこともなにも、聞いているとおりよ？ 今年ほゆるさんと夢愛さん、ふたりの女子部員に、スカウト実習への参加願いが来たってこと」

「ええええええええっ!？」

わたしはもう、なにがなんだかわからなくて、信じられない思いで頭の中がいっぱいになって、ほとんどパニック状態に陥ってしまった。

「異例のことではあるけど、そういうわけだから。我が部の恥にならないだろう、しっかりするのよ？」

『は……………はいっ…』

ほゆるちゃんとわたしの気合いを込めた声が、ピッタリと綺麗に重なった。

だけど驚きは、これだけには収まらず。

「というわけで、今年は合計三名の参加ってことになるわ」
「……………えっ？」

今度は現くんも含めた三人の声が重なる。

「つまりね、現くんにもスカウト実習の参加願いが届いたってことよ」

「で…………でも、笹枝先輩！ 郵便配達員は女性の仕事ですし、だいたい現には魔力もないですよ！？」

さすがのほゆるちゃんも、さっきまでの戸惑いを通り越した驚愕の表情で、笹枝先輩に詰め寄っていた。

「そうね。でも、事実だから。ほら、これが参加願いの書面よ」

そう言いながらポケットから取り出した紙を広げる先輩。

『風間夢愛さん、時時ほゆるさん、水玉現さん、以上三名に、スカウト実習への参加をお願い致します。』

風間さんと時時さんはもちろん、郵便配達員としての実習、男性である水玉さんには、配達員のサポート係として、実習をお願い致します』

郵便局の印が押されたその紙には、そんな記述があった。

「そういうわけだから、三人とも、夏休み中の部活への参加は免除します。スカウト実習、頑張ってきてね！」

笹枝先輩のメガネ越しの瞳は、わたしたちの未来の姿を思い描いてくれているのか、ダイヤモンドのようにキラキラと光り輝いていた。

夏休みに入ったわたしたちは、スカウト実習のため郵便局へと来ていた。

郵便局の中へと通されたわたしたちには、それぞれ制服が渡され、早速更衣室に入って着替えた。

もちろん更衣室は男女で分かれているから、現くんは、わたしやほゆるちゃんと違う部屋だ。

局員の制服は男性と女性でデザインが違っていて、下も男性はズボン、女性は長いスカートとなっている。

白を基調としたカッコいい制服になっているのだけど。わたしとほゆるちゃんに渡されたのは、普通の制服とはちょっと違っていた。つまりは、わたしたちが憧れてやまない配達員専用の制服なのだ。

綺麗な白い色調なのは変わらないものの、より優雅さを強調するように、ゆったりとした曲線美をたたえたデザインとなっている。

女子魔道部で使っている魔女服は、この配達員の制服をもとにデザインされたものだ。

これが本物……、なんて考えると、それだけで鼻血ものの興奮を覚える。

さらに配達員としての実習ということで、わたしとほゆるちゃんには魔法のホウキも渡された。

しっかりした作りで、毛先も綺麗に揃っている。柄の握り具合も初めて持ったのにピッタリとフィットする感じ。

部活で使っているホウキと比べると、ずっと高価なのが見るからにわかった。

配達員さんがホウキを新調するとき、それまで使っていたものを練習用として残しておくらしい。このホウキはそういった練習用のホウキだった。

わ……、このホウキ、実際に憧れの配達員さんが乗って、空を優雅に飛んでたんだあ……。

そんなふう考えたわたしは、思わずホウキにほつたをすりすりしたくなってしまったほど。

これからわたしたちは、このホウキに乗って大空を飛び回るんだ……。

両足を揃えてホウキに横座りし、白く清純な雰囲気の衣装を身にまとい、長いスカートを風になびかせながら空を舞うその姿を想像するだけで、わたしの心はポカポカと温まっていくようだった。

いそいそと着替えを終え、準備を整えたわたしたち三人は、局長室へと通された。

そして今、こうして撫子さんから直々にお話を聞かせてもらっている。

「ようこそいらっしやいました。わたくしがこの郵便局の局長、紙かみ鳴峠なりとうげ撫子なでこです。風間夢愛さん、時時ほゆるさん、水玉現さん、これから二週間、よろしく願います」

「は……はいっ！　ここここ、こちらこそ、よよよ、よろしく願いますっ！」

緊張でガチガチになりながら、わたしは局長さんに答える。

ああ、憧れの職場に、二週間だけの実習とはいえ、こうして立っているなんて。

そう考えただけで、わたしは天にも昇りそうな気分だった。

……実際、実習が始まったら魔法のホウキで大空へと昇るようになるはずだけど。

「時々ほゆるです。よろしくお願いします」

「水玉現です。このたびは実習にお招きいただき、ありがとうございます」

わたしとは対照的に落ち着いた様子のふたりは、しっかりと名前を名乗りながら答えていた。

「あつ……、わたしは風間夢愛ですっ！」

慌てて名前を名乗るわたしだったけど、

「はい、わかっておりますよ。夢愛さんは少々、落ち着いたほうがよろしいかもしれませんね」

いきなりのお叱りを受けてしまった。

シユンとなつて頂垂れるわたしに、局長さんは笑顔を投げかけてくれた。

「ふふつ。そんなに硬くならなくてもいいですよ。あつ、それとこの郵便局での慣例となっておりますので、みなさんのことは、下の名前で呼ばせていただきますね。わたくしのことも、撫子と呼んでください」

「は……はいっ、わかりました、撫子さんー！」

まだ緊張は完全に解けていなかったけど、わたしは撫子さんの名前を呼ぶことで、ちよっとは落ち着けたような気がした。

「みなさんには、これからの二週間、郵魔^{ゆうま}の見習い^{みしゆ}として活動していただきます」

『郵魔？』

撫子さんの言葉に、わたしたち三人が疑問符を重ねる。

「ええ。郵便配達員は魔女がその役割を務めるというのは、ご存知のとおりかと思えます。ですから、郵便魔女さんを略して、郵魔なのですわ」

ぱーっと明るい笑顔を輝かせながら、説明を加えてくれる撫子さん。

「わたくしの提案で、今現在、強く推しておりますの。マスコットのYUMAちゃん人形も作っていただけるといいようにお願いしている最中です。これがそのデザインですわ。とっても可愛らしいでしょう？」

撫子さんは自慢げに、紙に描かれた落書き（失礼）を見せつけてくる。

『は……はあ……』

わたしたち三人は、ただ曖昧に頷き返すことしかできなかった。

撫子さんはしばらくのあいだ、「郵魔」という名称やマスケットキヤラクターについて嬉しそうに語っていた。

でも、正直その呼び方は、まったく聞いたことがなかった。撫子さんが提案してからまだ日は浅いみただけど、それでも全然浸透していないのは明らかだ。

さすがにそれを指摘するのも悪いだろうから、三人とも黙ってはいたけど。

ともかく、思う存分「郵魔」に対する思いを吐き出したあと、撫子さんは小さく咳払いをし、気を取り直して真面目な口調で語り始めた。

「基本的な部分からお話しますので、退屈かもしれませんが聞いてください。

みなさんもご存知のとおり、大気汚染や水質汚濁によって、今の世界は人が住める場所が極端に限られてしまいました。

それを解決するため、人は大空へとその生活の舞台を広げていきました。

確かに住める場所は格段に増えましたが、その反面、利便性という点においては我慢を強いられています。

とはいえ、それも仕方のないことと、諦めるしかないのかもしれませんが。地球がこのようになってしまったのは、わたくしたち人類の責任なのですから。

ですが、人間として便利な生活を切望するのは、ごく自然な流れと言えるでしょう。

大空を自由に飛び回る。人類にとって、それは恋焦がれてきた長年の夢。

その夢に、人類はついに手を届かせました。

もつとも、郵魔の使う魔法のホウキや、魔力を使って空を飛べる車なんかはお金さえあれば買えるようになりましたが、そもそも魔力を持つている人自体が稀です。

ですからあなた方は、その稀な存在ということになりますわね。

でも、決して優れた存在というわけではありません。ごく普通の一般人です。それを忘れてはいけませんよ。

ただ、せつかく持って生まれた魔力なので、それを世の中の役に立てられるとしたら、とても素敵なことだと思いますか？
……現さんは魔力を持っておりませんが、もちろん劣っているわけではありません。だからこそこうして、実習への参加をお願いしたのですからね」

そこまで一気に話した撫子さんは、一旦間を置き、さらに言葉を続けた。

「昨今は夢のない時代と言われております。

大空へと手を伸ばしたとはいえ、数十年前に比べると住む地域は狭まり、人口の減少も留まることを知りません。

人類には未来なんてない。そういった絶望的な説を唱える人もいるくらいです。

ですが、本当にそうでしょうか？

未来は確かにないのかもしれませんが、……多くの人が考えているように、本当に諦めてしまっただけです。

でも、諦めなければ、未来は必ず開けていくはずですよ。そう信じることが、大切なことです。

わたくしはそう思っています。

未来を信じるために必要なのは、穏やかな心。純真無垢な子供のように、素直で穢れのない心なのです。

今どき流行らないかもしれませんが、手紙というのは本当に素晴

らしいものだと思います。

手紙にしたためた想いは、心を温めてくれる魔法のようなもの……。

そんな温かな魔法の詰まった手紙を通じて、たくさん人に夢をお届けする。それこそが、郵魔としての務めなのです」

わたしたち三人は声を挟むことなく、穏やかに語り続ける撫子さんの言葉を、心で受け止めていた。

憧れだけでここまで来てしまったけど、しっかりとした心構えを持って臨まなきゃ。

わたしは決意を新たにす。

「頑張ってくださいね、みなさん」

笑顔でエールを送ってくれる撫子さん。

続けてぼろっと、こんなことを口にした。

「……それにしても、スカウト実習は政府からも認められた制度ですが、お給料を払わずに実地訓練と称して仕事を手伝ってもらえますので、本当に助かるんですね」

……そういう本音は、隠したままにしてほしかったな……。

コンコン。

局長室のドアをノックする音が響く。

「はい、どうぞ」

「失礼します」

撫子さんの声を待つてドアが開かれ、ひとりの女性が部屋の中に入ってきた。

シャキッと背筋を伸ばし、配達員専用の制服をカッコよく着こなすその女性は、わたしたちにも一礼して撫子さんの隣に並ぶ。

「お待ちしていました。みなさんにご紹介します。彼女があなた方を指導してくれる、郵魔の折鶴おりつるおづが桜華さんです」

「よろしく」

桜華さんは見た目のクールな印象どおり、落ち着いた様子で軽く頭を下げる。

長い黒髪のポニーテールが彼女の動作に合わせて微かに揺れることすら、優雅に思えてしまう。

「入社三年目で、十八歳でしたかしら？ まだまだお肌もツルツルピチピチで、水はじきもよさそうで、うらやましい限りですわ」
「……ピチピチなどと言うのは、おやめください」

ほんわかした雰囲気ふんいきの撫子さんとは対照的な桜華さんは、呆れ顔で言い返していた。

撫子さんはふわふわのシルバードロンドを揺らめかせながら、絶

えず笑顔を浮かべているような感じだけど、年齢はちょっと想像がつかない。

ぱっと見だと二十代半ばくらいに思えるけど、局長という立場やさっきの発言内容から考えると、おそらく三十路を越えているに違いない。

それに対して桜華さんのほうは、落ち着いているからか、ぱっと見はやっぱり二十代半ばくらいに思えるのに、まだ十八歳だなんて雰囲気だけじゃなくて、実年齢も対照的なようだ。

……なんて口に出したりしたら、さすがの撫子さんでも雷を落とすかもしれないな。

「わたくしは今日、これからちょっと時間が取れませんので、あなた方の指導役は桜華さんに一任します。桜華さんの言うことを聞いて、しっかり実習プログラムをこなしてくださいね」

「はい、わかりましたっ！」

元氣よく返事をしたわたしは、桜華さんにも、

「よろしくお願ひします、桜華さんっ！」

と言って、深々と頭を下げた。

それに合わせて、ほゆるちゃんと現くんも同じように頭を下げる。

「ああ、よろしくな」

ニヤリ。

確かにクールで落ち着いた感じではあるのだけど。

桜華さんが微かにこぼした笑顔は、

なんとなく……、

わたしたちを小バカにしたような笑いのように、思えてしまった。

ああもう、わたしってば、どうしてそんなふうに思っちゃうのよっ！

これからの二週間、わたしたちを指導してくれる、憧れの郵便配達員さんだっていうのにつ！

「それではわたくしは仕事がありますので、お話はここまでということにしましょう。みなさんは桜華さんと一緒に庭に出てくださいね」

『はいっ！ これから二週間、よろしくお願いしますっ！』

はつきりと大きな声で答えるわたしたちに、撫子さんは優しい笑みを送ってくれる。

「ふふっ、やがてはこの郵便局で、ずっと長い時間と一緒にできるようになれたらいいですね」

そんな撫子さんの言葉をお土産にいただき、わたしたちは局長室をあとにした。

郵便局はそれほど広い敷地ではなかったけど、撫子さんが庭と呼んでいたように、建物の隣にちよっとだけ開けた場所があった。

朝にはそこで、局員全員参加の体操なんかも行われるらしい。

わたしたちが庭に向かったのは、最初の実習プログラム　飛行
訓練をするためだった。

そして庭にたどり着いたわたしたちに向かって放たれたのは、指
導役である桜華さんのこんな言葉だった。

「とうわけ、さっき紹介されたとおり、オレがおまえらを指導
する折鶴桜華だ。言っておくが、ビシバシと厳しく指導していくか
らな。覚悟しておけよ！」

そう言いながら、どこから持ち出してきたのか、竹刀を地面に勢
いよく叩きつけると、バシーンと大きな音を響かせる。

……さっきは局長である撫子さんの前だったから抑えていただけ
で、基本的にはこういう人なのね……。

自分のことを、「オレ」と言う桜華さん。

カッコいい印象なのは変わらないけど、思い描いていた彼女のイ
メージとは百八十度変わってしまった気がする。

わたしが感じた小バカにしたような笑いは、隠しきれなかった本
質的な部分がにじみ出ていたってことなのかもしれない。

なんだかこれからの二週間、前途多難って感じ……。

桜華さんの豹変ぶりに、さすがのほゆるちゃんも現くんも戸惑っ
ていたけど、それでもやるしかない覚悟を決めているようだ。

そうそう、現くんもわたしたちと一緒に実習を受けているわけだ
けど。でも彼は、魔法のホウキに乗って空を飛ぶことができない。

参加願いの手紙にあったとおり、現くんは配達員のサポート係と
しての役目を求められている。だからてっきり、わたしたちとは別
々に指導してもらおうのだと思っていた。

「だけど、どうやら現くんも一緒に、桜華さんのもついで実習を受けるみたい。」

「まずは飛行訓練からやるぞ。夢愛とほゆるは、真剣に飛べよ。手を抜いてるようだったら、容赦なく竹刀を振り下ろすからな！ それから現、おまえはそのあいだ、とりあえず自分の考えうる方法で彼女たちをサポートしてみろ！」

スカウト実習の最初のメニューは、桜華さんのそんな命令から始まった。

竹刀を振り回しながら、桜華さんが怒号を響かせる。

桜華さんのなにやら体育会系な指導のもと、わたしとほゆるちゃんにはホウキに乗って、郵便局の庭の上空を飛び回る。

そんなわたしたちに、現くんはちょっと恥ずかしがりながらも応援の声を送ってくれていた。

現くんはなんとというか、部活のときとあまり変わらない感じ。桜華さんが望んでいるのが、はたしてそういうことなのか、よくはわからないけど。

でも今のわたしには、そんなことを気にしている余裕なんて、まったくなかった。

必死に飛ばないと、容赦なく桜華さんの竹刀が襲いかかってくるから……。

こうして、スカウト実習という名のスパルタ訓練は、問答無用でスタートを切ってしまった。

ひとしきり庭での飛行訓練を続けたあと、わたしたちは実践的な訓練へと移ることになった。

実際に手紙を届ける、配達員としての仕事のお手伝いだ。

郵便局は各地の居住地域ごとに存在していて、配達する範囲はその地域だけ。

地域内の多くの場所に郵便ポストが設置しており、そこから回収された手紙が郵便局へと集まってくる。

回収の仕事は、ホウキに乗った郵便配達員ではなく、魔法の車を使う職員さんによって行われる。

地域内の郵便ポスト全部を巡って回収するため、ホウキでは運びきれないため、現在は車が使われているらしい。

魔法の車を運転するのにも魔力と免許が必要だから、専門の職員さんがいるのだけ。

一方、手紙などの配達に関しては、空中住宅も含めて入り組んだ場所なんかに届ける場合もあることから、車ではなく小回りの利くホウキが使われている。

それが、わたしたちの憧れている、郵便配達員さんの仕事だ。

……撫子さんが推していたわけだし、「郵魔」って呼んだほうがいいのか……。

でも浸透していない呼び名だから、いまいちピンと来ないけど……。

ともかく、そんなわけでわたしたちは、桜華さんと一緒にホウキ

で空を飛び、配達先の家まで届ける仕事のお手伝いをする事になった。

もちろん、現くんは飛べないので、お留守番。

といつても、別の実習が待っているようで、お仕事が一段落したのか庭に姿を現した撫子さんに連れられて、どこかへ行ってしまった。

やっぱり現くんだけ、別行動になるんだ。……ちょっと、残念。
と、今はそんなこと、気にしてられない。
わたしも気合いを入れて頑張らないとっ！

決意を胸に、ホウキに腰を下ろすと、青く澄み渡った真夏の天空へと飛び立つ。

そしてわたしは、すでに上空へと昇っていた桜華さんとほゆるちゃんのすぐ横に並んだ。

「よし、それじゃあ行くぞ！」
『はいっ！』

わたしたちは桜華さんの号令に、声を揃えて大きく返事をする。
お手伝いとはいえ、初めての郵便配達のお仕事に、これから向かうのだ。

テンションが上がって思わず笑顔がこぼれる。

ふと、ほゆるちゃんと目が合った。

彼女も、笑顔だ。

わたしたちは軽く頷き合い、先導して飛び始めた桜華さんの背中を追っていった。

郵便配達員さんは、ホウキの先に郵便袋をくくりつけて配達へと向かう。

その袋の中には、手紙などの郵便物が入っている。小包とか、ある程度以上のサイズのは、別途、魔法の車を使って配達されるのだけど。

「おまえらには、まだ袋を任せられないからな」

桜華さんはそう言いながら、郵便袋を自分のホウキにくくりつける。

そしてわたしたちには、配達先の住所がずらりと書かれた紙が渡された。

「今日の配達先のリストだ。上から順番に届けていけば最短ルートになるよう、コンピューターで計算されている。基本的には、この順番どおりに配達していけばいい」

「はいっ！」

渡された紙には、たくさんの住所が羅列してあった。三十ヶ所以上はあるだろうか。

わ〜……、一日にこんなにたくさん、届けなくちゃならないんだ……。
と、思っていたら、

「今日はちょっと少なめだからな、おまえらがいて配達効率が悪くても、とくに問題はないだろう」

桜華さんは容赦なく、そう言い放った。

「それでも、少ないなんて……。」

それにしても、いくら事実とはいえ、そんなふうには言わなくてもいいような……。」

ちよつと不満を顔に浮かべてしまう。

「ほら、最初の家への手紙だ。夢愛、おまえが持て。言っておくが、落として紛失なんかしたら、罰則ものだからな」

そんなわたしに、桜華さんは郵便袋から封筒を取り出すと、なんとそのまま投げつけてきた。

「わわっ！」

わたしは思わず焦った声を漏らしながら、必死にその封筒を両手でつかもつとする。

どうにか落とさずには済んだけど、ホウキから両手とも離してしまい、バランスを失ったわたし。

封筒どころか、自分自身をも落としてしまいそうになった。

「ふう……。」

どうにか体勢を立て直し、冷や汗を垂らしながらも、安堵の息をつく。

「油断は禁物だぞ。事故が起こっても、こちらは責任を持ってないからな」

冷たく言い放ち、桜華さんは速度を落とすことなく、配達先に向かって飛び続ける。

「……夢愛、大丈夫？」

「うん……」

ほゆるちゃんが心配して手を差し伸べてくれた。

「ありがとう」

彼女の肩を借り、腰の位置を戻してホウキを安定させると、小さくなり始めている桜華さんの背中を再び追いかけた。

それにしても、ちょっと厳しすぎるよ……。

こんな状態で二週間も頑張っていけるのかな……。

わたしはちょっと弱気になりかけていた。

郵便局の配達地域は、かなり広い。

その地域をいくつかに区切り、分けられた範囲を、それぞれの配達員が担当する。

配達員の人数は少ないから、それなりに広い地域を担当することになるのだけど。

ただ、配達する地域が決まっていて、また、憧れの職業で注目を受けることも多いためか、配達地域の人たちには顔を覚えられているようだ。

「あっ、配達員さん、こんにちは〜！」

といった感じで気軽に声をかける人も少なくない。
入り組んだ空中住宅のあいだを飛んでいると、洗濯物を干している主婦の方や、ベランダから外を眺めている子供たちと視線が合ったりすることも多いのだ。

現にわたしも今まで、配達員さんを見かけると必ず、笑顔で「頑張ってください」と声をかけていた。

そうやって声をかけると、わたしの家の近くを担当する配達員さんは明るく、「ありがとう」と答えてくれたりするのだけだ。

桜華さんは澄ました顔で、軽く会釈するだけだった。

そりゃあ、愛嬌を振りまく必要はないかもしれないけど、もうちょっと親しみを持てるような対応をしてもいいんじゃないかな……。

「こんにちはっ！」

桜華さんの対応にちよつと不満を抱いたわたしは、声をかけてくれた人に元気な声で答える。

するとその人は、笑顔になってくれた。つられてわたしの心も温まり、自然と笑みがこぼれる。

でも、その人が見えなくなった途端、

「余計なことはするな。仕事に集中しろ。へらへら笑っていても、仕事は進まないぞ」

前を飛ぶ桜華さんから冷たい言葉がぶつけられてしまった。

そのあとも、わたしたちは桜華さんからの厳しい言葉を受けながら、「配達のお手伝いを続けた。」

三十ヶ所以上の配達場所を回り、さすがにクタクタになっていたわたしたちに、桜華さんからの労いの言葉なんて、もちろんあるはずもなかった。

「今日の実習はこれで終わりだ。明日は飛行訓練なしで、すぐに配達へと向かうぞ。遅刻なんてもつてのほかだからな」

一方的に言い残すと、桜華さんは郵便局の建物内へと戻っていった。

庭に取り残されたわたしたちのもとへ、着替え終えた現くんが駆け寄ってくる。現くんのほうは、わたしたちより早めに実習が終わっていたようだ。

「ふう……。それじゃ、あたしたちもさっさと着替えて、帰りましようか」

ほゆるちゃんの疲れきった声に、わたしは黙って頷いた。

「ほんっと、なんなのよ、あの人！」

真っ先に怒鳴り声を発したのは、ほゆるちゃんだった。

着替えを終え、ホウキも返したわたしたちは、郵便局を出て帰路へと就いた。

もしホウキを持っていたとしても、免許がないわたしたちには、勝手に乗ることは許されない。

だから、歩いて帰る以外に手段はなかった。

もちろん、自分のホウキなんて学生の身分で持てるはずもないのだけ。

歩いて帰るには結構な距離があったけど、わたしたちは黙ったまま歩き続けていた。

その途中で、ふと思立ったわたしたちは、学校帰りによく寄っているこの公園へと足を運んだ。

いつものベンチに座り、ほっとひと息ついたところで、さっきの彼女の怒りを含んだ言葉は吐き出されたのだ。

ずっと心の中でくすぶり続けていたのだろう、ほゆるちゃんは頭から湯気を立ち昇らさんばかりの勢이었다。

彼女の気持ちもわかるけど。

でも、わたしはもうちょっとだけ冷静に考えていた。

配達中の様子まで知っているはずはないけど、冷静なのは現くんも同じだったようで、

「まあまあ、落ち着いて、ほゆる。そんなに、ひどかったの？」

穏やかな口調で、ほゆるちゃんに声をかけた。

「そうなのよ！ 聞いてよ、現！ あの桜華って人ったらね」

現くんから促され、彼女は配達中の出来事を詳しく話して聞かせ

た。

わたしもそれを黙って聞く。

怒りで勢いに任せた感じだったから、事実をねじ曲げて伝えたりしたらいけないと、わたしはそう考えて見ていたのだけど。

ほゆるちゃんは怒っていても、しっかりとした状況説明ができていた。

さすがだな。わたしも見習わないと。

それに彼女は、桜華さんの冷たい態度なんかにも怒ってはいいたけど、話を聞いていると、どうもわたしに対して厳しい言葉をぶつけてきたのを怒っているみたいに思えた。

実際のところ、飛行技術でもほゆるちゃんより遥かに劣るわたしだから、桜華さんからの怒鳴り声を食らう回数も多かったってだけのだけど。

ほゆるちゃんは、桜華さんがおとなしくて組み敷きやすいわたしにばかりキツく当たっていると考えて、憤慨しているようだった。友達として、わたしを心配してくれているのだ。そう思うと心の中が温かくなってくる。

「だいたい夢愛は、あまり強く言い過ぎると沈みまくって大変なことになるんだから！ 立ち直らせるために苦労することこの身にもなれってのよ！」

……あれ？ なんだかちょっと、心配の方向性が間違ってきてない？

「あゝ、確かにそうだよね」

「うわっ、現くんまでっ！」

そりゃあわたしは確かに、嫌なことなんかがあるとしばらく気持ちが悪んだままになっちゃって、ふたりにも迷惑かけたことが今までにも何度かはあったけど。

そのたびに、この公園に来て沈んでいるわたしを、ほゆるちゃんと呼ぶ人が慰めてくれたのも、一度や二度じゃないけど。

……なるほど、考えてみたらわたしは、ふたりにずっと助けられて生きてきたんだな……。

「それはほんとに感謝してるけどっ！」

突然叫び出したわたしに、ふたりは目を丸くする。

あ……。

わたしの頭の中では話がつながっていたけど、実際にはちょっとずれた方向に進んでいたわけだから、驚かれるのも無理はないよね。けどふたりとも、すぐにわたしの考えを汲み取ってくれたらしい。

「……うん、いいのよ。……それで？　続けていいわよ」

ほゆるちゃんは優しく笑顔を向けてくれる。

反対側からわたしの顔をのぞき込んでいた現くんも同じように微笑みを浮かべながら、話を聞いてくれる体勢になっていた。

「あ……うん。あのね、確かにちょっと、ひどい言われ方とかもしてたけど、でもそれって、わたしたちのためを思って言ってくれてるんだよっ！」

素直に思っていることを口にするわたしの声に、ふたりとも黙って耳を傾けてくれた。

「指導する立場にあるんだから、甘やかしてもダメだって考えて、あえてキツく当たってるんだと思うの。きつと桜華さんだって、そんな嫌われ役みたいなこと、やりたくないはずだよっ！」
「うん」

ほゆるちゃんが軽く相づちを打つ。

「だからね、桜華さんのこと、そんなに悪く言っちゃダメだと思うのっ！」

「はい、よく言えました！」

わたしが言いたいことを喋り終えるやいなや、ほゆるちゃんはわしゃわしゃとわたしの頭を撫で回しながら、小さな子供を褒める母親のような言葉を放つ。

「わわわっ！」

頭を撫でる力が強すぎて、わたしは首がぐるぐる回って、焦った声を漏らしてしまったけど。

っていかほゆるちゃん、わたしのこと、ちょっとバカにしてない！？

なんて考えたのは、もちろん間違いだった。

「あなたの言いたいことはわかった。そうね、きつとそうだと思うわ。反発する心も原動力になったりするかもしれないけど、それよりめちゃんと信頼することのほうが大事よね」

ほゆるちゃん言葉に、現くんも小さく頷く。

「うん、ぼくもそう思うよ。……ま、こっちは撫子さんの手伝いで感じて、優しく丁寧にいろいろと教えてもらえたけど」

ただ、続けられた言葉にほゆるちゃんは、

「な……、なんでそっちは厳しい実習じゃないのよ!?　なんか、不公平だわ!」

なにやら違った方向に食いついて、またもや怒鳴り声を上げ始めた。

うん、ほゆるちゃんはやっぱり、こっじゃないとねっ!

ちよっと失礼かもしれない感想を抱きながら、わたしは明日からも続くスカウト実習を一生懸命頑張ろうと心に誓うのだった。

次の日も、実習の続くわたしたちはもちろん、郵便局へと向かった。

昨日桜華さんが言っていたとおり、今日は最初から配達へと出かけることになった。

「頑張ってきてね」

撫子さんの横に並んで立ち、応援しながら送り出してくれる現くんを残し、わたしとほゆるちゃん、桜華さんのあとに続いて飛び立った。

いいな、現くんは。今日も優しく丁寧に撫子さんから指導を受けるんだろうなあ。

思わず恨みがましい考えまで浮かんでしまう。

わたしたちは昨日と変わらず、厳しい声をぶつけられながらも、配達をこなしていった。

昨日渡されたリストにあった住所は三十ヶ所くらいだったけど、今日渡されたリストには、その倍以上の住所が書かれてあった。

桜華さんから聞いてはいたけど、ほんとに昨日は少なかったんだ……。

「おい、夢愛！ ぼさつとするな！ 飛び方が崩れてるぞ！」

「は……はいっ！」

気を抜くとついつい考え込んでしまうわたしは、何度も桜華さんからの叱責を受けていた。

郵便配達員は、優雅に空を飛ぶ姿が特徴となっている。だからこそ、いつでも気を緩めず、美しいスタイルで飛び続ける必要があった。

仕事の効率から考えると、見た目なんか気にしないで、がむしやらに飛んだほうがいいような気もするけど。

でも、それじゃダメなのだ。

優雅さを失わず、なおかつ迅速に。

求められる飛行技術は、やっぱり高いレベル。

わたしなんかには、とうてい務まる仕事ではないのかもしれない。だけど、こうしてスカウト実習にまで参加できているのだから、ここは踏んばらないとっ！

ふと見ると、ほゆるちゃんが、大丈夫？ といったような目を向けてくれていた。

うん、大丈夫っ。

わたしは軽く笑顔を返し、彼女に頷いてみせた。

必死に頑張っているわたしではあったけど。

飛行技術の劣るわたしには、何度も何度も桜華さんからの怒声が飛んできた。

それはもう、集中砲火と言っても過言ではないくらいに。

「こら、夢愛！ 遅れてるぞ！ ボサツとするな！」

「足が開いてる！ パンツ見られたいのか、バカタレ！」

「ふらふら飛ぶんじゃない！ まっすぐ前を見て飛べ！」

「汗が汚らしいぞ！ 素早くハンカチかタオルで拭くようにしろ！」

「息が荒すぎる！ ある程度は仕方がないが、そんなんじゃ、とうてい優雅とは言えないだろうが！」

「夢愛！ 眉間にシワを寄せるな！ 苦しくてもそれを感じさせるんじゃない！」

「足をゆらゆらさせるな！ だらしない！ しっかりと揃えて固定しておけ！」

「髪もボサボサでみつともない！ 風になびく印象は大事だが、そこまでいくと鳥の巣としか思えないぞ！」

次から次へと繰り出される叱責の声。

わたしはそれを懸命に受け止めて、歯を食いしばっていた。

桜華さんは、わたしのために言ってくれてるんだ。

今はまだ実習を受けているだけの、単なるお手伝いでしかないけど。

いずれは一人前の配達員になれるように、頑張らなきゃっ！

そう思って、涙がこぼれ落ちそうになるのをどうにか堪え、ホウキを操る。

ほゆるちゃんはわたしを心配しているようだったけど、それでも昨日語った決意を理解しているからだろう、なにも言わずに様子を見守ってくれていた。

だけど桜華さんからの怒鳴り声は容赦なく続く。

「おい、早くしろ！ 次に行くぞ！ …… ったく、ほんとに下口いなおまえは！」

「ひっつ……、っ……ごめんなさいっ……！」

なんだか、単に悪口を言われていじめられているような感覚に陥ってしまう。

でも、負けないっ！

わたしは気合いを入れ直し、遅れないように飛び、必死に追いつがる。

そんな様子を見ても、桜華さんの態度は当然ながら変わることもなく、

「表情が硬すぎる！ 風を気持ちよく全身で受け止め、清々しい気持ちで飛べ！ まったく……。少しは自分なりに考える！ このウスノ口が！」

わたしはひたすら、厳しい声を浴びせかけられ続けていた。

配達する手紙も倍増した今日、急がないと配達しきれなくなってしまう。

わたしとほゆるちゃんがいることで遅れてしまうのは、ある程度仕方がないのかもしれないけど。

主にわたしのせいで、思ったよりも時間がかかっていた。

でも、息が上がってしまい、どうしようもない。

桜華さんからの叱責の声に答えることもできず、ただ必死に食らいついていくだけ。

もう優雅さのカケラもない状態だった。

自分の体力のなさを実感する。

魔道部で何本も「走り込み」をする意味が、やっとわかったような気がした。

と、そんなわたしの様子を見るに見かねたのだろう、今まで黙っていたほゆるちゃんが、桜華さんに抗議の言葉をぶつける。

「ちょっと、桜華さん！ 夢愛はもう限界です！ 急がなきゃいけないのはわかりますけど、少し休憩させてください！」

ほゆるちゃんも汗が溢れ出してきてつらそうではあったけど、それでもまだ飛び続けられそうに思えた。

つまり彼女は、わたしのために、そう言ってくれたのだ。

気持ちは嬉しいけど、でもわたしのためにこれ以上遅れてしまうのは、とっても心苦しい。

いいよ、ほゆるちゃん。わたし、頑張るからっ。

そう伝えたかったのだけど、意思に反してわたしの口からは声がこぼれ出すことはなかった。

疲れのせいで声にすらならなかったのだ。

わたしの気持ちはわかってきてくれているはずだけど……。

それでもほゆるちゃんは、桜華さんへの抗議をやめはしなかった。

「こんな状態で飛び続けたりしたら、倒れてしまつて余計に時間をロスすることになりますよ!? 五分でも十分でもいいですから、休ませてやってください!」

必死の説得。

今までの桜華さんの様子から考えると、それでもピシヤリと訴えを退けて、仕事を続けるだろう。

わたしはそう思っていた。

でも。

「……わかった。ちょうど下に公園があるようだし、あそこで休むとするか」

意外にも素直に、ほゆるちゃんの提案は受け入れられた。

わたしたちが降り立った公園。

そこは、昨日も立ち寄った、いつもわたしたちが足を運んでいる公園だった。

もちろん、いつもとはメンバーが違っていて、現くんの代わりに桜華さんがいるわけだけど。

それでも公園は、わたしたちを温かく迎え入れてくれているように思えた。

「あ……あの……、すみません、わたしの、せいで……」

ベンチに座ったわたしは、まだ少し息を切らしたままの声を伴って頭を下げる。

「……倒れられても困る。それだけだ」

桜華さんはそう答えると、ベンチから立ち上がる。

「仕方がないから、飲みものくらいおごってやる。汗をかいてるからな、スポーツドリンクにするぞ。いいな？」

「あ、はいっ！」

口調は今までと変わらないけど、初めて触れる桜華さんの優しさを感じ、わたしは疲れなんて吹き飛んでしまうように思えた。

やがて三本のペットボトルを持って戻ってきた桜華さんは、わたしたちに一本ずつそれを手渡す。

もちろん桜華さんも、残った一本のスポーツドリンクを飲み始めた。

「いただきますっ」

お礼を述べて、わたしもスポーツドリンクをのどに流し込んだ。冷たさが、のどを伝って全身に広がっていく。

高鳴っていた鼓動が落ち着いてきても、日陰になっているとはいえず暑い真夏の気温で、汗は止め処なく流れ出てくる。

それでも一瞬の清涼感に、これ以上ないほどの心地よさをプレゼントされたように思えた。

「あつ、ゆうびん屋さんのお姉ちゃんだ！」

不意に、明るい声が響き渡る。

五歳くらいだろうか、可愛いらしい女の子が、顔を上げたわたしたちの目の前に立っていた。

彼女はひまわりのような笑顔を咲かせながら、キラキラ輝く瞳をこちらに向けている。

「わたしね、大きくなったら、ゆうびん屋さんになるの！ だってだって、おようぶくが、とってもかわいいんだもん！」

女の子は元気いっぱい、自分の夢を語る。

そんな彼女の夢を壊しちゃいけないとは思ったのだけど。

ただわたしは、ウソをつくものいけないかな、と考えて素直に答えていた。

「うん、可愛いよね、この制服っ！ でもね、わたしとこっちのほゆるちゃんは、お手伝いしてるだけで、今はまだ郵便屋さんじゃないのよ。がっかりさせちゃって、ごめんなさいね」

そう言いながらも、やっぱり余計なことだったかなと、ちょっと

後悔の念が湧き上がる。

わたしの言葉を聞いて、女の子は一瞬キョトンとした表情になったけど。

すぐに満面の笑顔に戻る。

「お手伝いさんでも、ゆうびん屋さんだよ！ だって、まだ、ってことは、そのうちなるんでしょう？ それにさっき、ホウキでとんできたの、わたし見てたの！ カッコよかったよ！ わたしも早くゆうびん屋さんになって、お空をとびたいの〜！」

元気で素直で、まつすくな瞳。

そんな彼女を見てみると、見ず知らずのこの子の夢のためにも、わたしは頑張って一人前の郵便配達員にならなきゃ、って気になってくる。

「大丈夫、あなたなら絶対になれるよっ！ お空を飛べるようになるっ！ そしたらわたしと一緒に、お空を飛ばうねっ！」

「うんっ！」

わたしが笑顔を向けて女の子の頭を撫でると、彼女はよりいっそう輝いた笑顔で応えてくれた。

「……まだ実習を受けている身分で、随分と偉そうなことをほざいてたもんだな。ま、せいぜい頑張れよ」

女の子と別れ、休憩も終えたわたしたちが空に戻ったあと、桜華

さんからは嫌味な言葉をぶつけられることになってしまった。

でも、わたしは負けない。

小さい頃、わたしもさっきの女の子みたいに、純粹な瞳で郵便配達員に憧れていたんだもん。

だから、わたしだって「ゆうびん屋さん」になれる。

そして将来は、あの子と一緒に大空を飛び回るんだ。

新たな決意を胸に空を飛ぶ今のわたしには、弱音や気の迷いなんてひとカケラたりとも残っていないかった。

セミの声が絶え間なく鳴り響く夏休み。

わたしたちのスカウト実習はなおも続く。

実習四日目ともなると、さすがに慣れもあつてか心に余裕が生まれてきていた。

桜華さんの厳しい怒鳴り声も、余裕を持って受け止めれば、現役配達員さんからのありがたいお言葉だつて思える。

悪口みたいなひどい言われようもあつたけど、それだつて教えを強く印象づけるためだと考えれば、気にもならなくなつてくる。

素直に「はいっ!」と返事をし、桜華さんの指示に従うわたし。

もちろん、ほゆるちゃんも指示されたことをそつなくこなし、配達も順調に進むようになっていた。

なんだか順調すぎて怖いくらい。

桜華さんからの厳しいお言葉も、その頻度がどんどんと減つてきているみたいだった。

と、その桜華さんが不意にこんなことを言い放つ。

「なんか、つまらんな」

「……え?」

わたしは思わず疑問符で返してしまう。

そしてトドメとばかりに放たれた言葉は、現役の配達員さんの口から出たとは思えない内容だった。

「おまえらをいたぶるのにも飽きてきたからな。ほら、郵便袋はお

まえに任せるぞ。配達先は渡してあるリストのとおりだからな。ま、
適当にやってくれ」

「きゃっ!」

まだたくさんの手紙が中に入ったままの郵便袋を、桜華さんは自
分のホウキから素早く外すと、わたしに向かって投げつけた。

驚きと袋の思った以上の重みに、わたしは悲鳴を漏らす。

「ちょっと、なにしてるんですか!？」

ほゆるちゃんが、さすがに眉をつり上げて抗議の声をぶつけた。

その勢いに圧されることもなく、桜華さんは投げやりな感じの声
で言い捨てる。

「おまえらふたりに任せるって言ってるんだ。オレは指導を一任さ
れてるんだからな、おまえらは言われたとおりによければいいんだよ。
オレはおまえらの後ろを飛んで、適当に様子を見させてもらう。せ
いぜい頑張って配達しろよ」

そう言って、桜華さんは言葉どおり、後ろに下がる。

「ほら、どうした？ 早く配達を続ける」

「は……はい……」

困惑しながらも、一応返事をするわたしとは対照的に、ほゆるち
ゃんは明らかに不満げな表情を見せていた。

「ふっ……。おい、ほゆる。その目はなんだ？ 不満があるのなら、
遠慮なく言ってみろ。だが、無駄に反抗するのは得策じゃないと思
うぞ？ スカウト実習の評価は、オレが握ってるんだからな」

桜華さんからぶつけられた、嘲笑まじりの言葉に、怒りを噛み潰すほゆるちゃん。

どうにか爆発するのだけは抑え、うつむきながらも黙って配達先に向かつて飛び始めた。

「あつ、待って、ほゆるちゃん！」

わたしもそのあとを急いで追いかける。

そしてその後ろには、桜華さんがただ黙ったまま飛んできていた。

不満を胸に抱えながらも、仕事を途中で放棄するわけにはいかなかった。

わたしとほゆるちゃんは、一生懸命配達を続けた。

桜華さんはずっと、黙ってついてくるだけ。

指示とか注意とかアドバイスとか、一切なし。

郵便袋を投げ渡される前とは打って変わって、まったくなにも言ってくれない。

たとえ厳しすぎてちよつと不条理な部分さえある言葉でも、わたしたちのためだと思えばこそ、素直に聞き入れていたのに。

これじゃあ最初から、わたしたちをいたぶるためだけに、厳しいことを言ってたんだって考えちゃう。

思わずわたしは、そうつぶやいていた。

「いや、実際そうだったんでしょ。もうはつきりわかったわ。あの人、やっぱりダメよ」

わたしのつぶやきを聞きつけたほゆるちゃんが、そっと横に並んでささやく。

あう……、やっぱりそう……なのかな……？

でも、でも……。

わたしとしては、認めたくなかった。

だって、郵便配達員というのは小さい頃からずっと憧れていた存在。

それなのに、こんな人が配達員さんだなんて。

わたしは悶々とした思いを抱えながら、配達を消化していく。

そう、消化。

気分が落ち込んでいると、どうしても考えることだけに意識が向かってしまう。

悪い癖だとは思っけど……。

でも、どうしても優雅に空を舞い、笑顔を絶やさずに配達を続ける、なんて気分にはなれなかった。

それはほゆるちゃんのほうも同じなのだろう。

いつもならいろいろと話しかけてくれて、ここ数日は桜華さんから無駄口を叩くなと叱られたりもしていた彼女だけど、今は全然言葉が発しない。

黙々と配達物をそれぞれの家のポストに入れていくだけ。

こんなの、味気ないよ……。

配達員の制服を見て声をかけてくれるような人も、どういっわ
か今日は全然いなかった。

……それも、そうか。

だって、こっちがピリピリしたり、ブルーになったりして
るんだから、話しかけられるような雰囲気じゃないよね……。

重苦しい沈黙に包み込まれながらの時間は、永久に続くん
じゃないかと思うくらい長く感じられた。

早く、帰りたい……。

憧れの郵便配達員さんの仕事をお手伝いしているというのに、
こんな思いを抱くなんて。

わたしは自分自身の心の動きに、驚きを隠せなかった。

「はぁ……」

何度目のため息だろう。

ソフトクリームもなかなか口に運べず、コーンを伝って溶けた冷たいクリームがわたしの手を濡らしていた。

「ああ、もう。あんたはほんとに……」

呆れ顔を浮かべながら、ほゆるちゃんがハンカチでわたしの手を拭いてくれる。

「あ……ありがとう……」

お礼の言葉を述べたわたしの顔は、やっぱり曇ったままだっただろう、見つめ返してくれたほゆるちゃんの顔も晴れることはなかった。

わたしたちは郵便局からの帰り道、いつもの公園へと向かった。そしていつもどおりベンチに座ってから、ほとんど口を開くことのないまま、わたしは何度も何度もため息をこぼしていた。

「夢愛……。気持ちはわかるけど、このあいだの元気はどこに行っちゃったの？」

「だって……」

ほゆるちゃんにそう言われたわたしは、口ごもることしかできない。

彼女だって、さっきはつきりわかったと言っていた。桜華さんが、

ダメな人だつて。

このあいだここでふたりに力説してから、ほゆるちゃんもずっと堪えて頑張っていたはずだ。

きつと心の中では、わたしと同じように困惑と憤りと悲しみと、いろんな思いが入り混じってぐちゃぐちゃになっているに違いない。

それでも目の前のわたしに、優しく語りかけてくれている。

やっぱりほゆるちゃんは、わたしと違って落ち着いてるな……。

そんなわたしとほゆるちゃんを、現くんも優しい瞳で見守ってくれている。

三人で一緒に、スカウト実習に参加できているのに。

頑張つて郵便配達員になろうつて誓ったのに。

わたしはほんとに、このまま実習を続けていていいのだろうか？

小さい頃からずっと憧れていた郵便配達員なのに、その憧れの気持ちさえも時間をさかのぼって揺らいでしまいそうだった。

「確かに、あの桜華つて人、ひどいと思うわ。あたしだって投げ出

したいくらいだよ。でも、夢愛と一緒に頑張るって決めてるから」

「ほゆるちゃん……」

彼女は、おそらく激しい気持ちを胸の奥にしまい込みながら、落ち着いた声で話しかけてくれている。

そして。

「だけど……、あんたがづらいなら、一緒に辞退するわよ？ スカウト実習はあくまでもお願いされて参加してるだけなんだから。途中で辞めるなんて前例のないことだけど、どうにかなるわ。進学し

て、それから改めて配達員を目指してもいいんだし」

優しく語り続けるほゆるちゃんの瞳を、わたしは黙って見つめ返す。

「……それに、他の夢に向かう道だって」

彼女はためらいながらも、そうつぶやいた。
ちよつと、苦しそうな声で。

小学校五年生で友達になって、それから三年半くらい。ずっと一緒に郵便配達員になろうって夢を語り合ってきた。

そんな彼女の口から、こんな言葉が飛び出してくるなんて。

でもそれは、ほゆるちゃんが夢を諦めたからではないだろう。
わたしのために、そう言ってくれてるんだ。

自分の夢よりも、友達のわたしのことを優先して考えてくれてるんだ。

「……ほゆるちゃん、わたし、もうちよつと頑張るよっ！ 実習は二週間だもん。まだ一週間以上残ってるけど、それくらい、すぐに過ぎちゃう。どうするかは、実習が終わってから考えればいいんだよ。そもそも、実習の評価でスカウトされるかどうかも決まるんだから、途中で辞めちゃったら絶対アウトだよねっ！」

たぶん表情は曇ったままだったに違いない。
だけどわたしは一生懸命、思いを言葉にする。

「……そうね。一緒に、頑張ろう」

「うんっ！」

穏やかな表情でわたしを包み込んでくれるほゆるちゃんは、実際にわたしの頭を抱きしめて、優しく包み込んでくれた。

「……ところで、現のほうはどうなの？」

わたしが落ち着いたのを見計らって、ほゆるちゃんは現くんを尋ねた。

「ん？ このあいだと変わらないよ。撫子さんから優しく丁寧に教えてもらいながら、ずっと彼女の手伝いなんかをやってる」

「なによそれ！ こんな思いをしているのは、やっぱりわたしたちだけってこと！？ なんかも不条理だわ！」

現くんの答えを聞いて、ほゆるちゃんは怒りをあらわにする。それ自体が不条理と言えるかもしれないけど、心の奥に溜め込んだ怒りのはけ口にしたかっただけなのかもしれない。

「ははは……。ま、でも、こつちもこつちで、なんか思ってたのと違うんだよね。重要な書類を見せるわけにもいかないだろうから、あまり仕事の手伝いも指示されないし。お茶を淹れたり肩をもんだりとか、そんなのが多いかな……」

「現くんは現くんで、結構悩んだりしてるんだ……」

わたしは少し驚いていた。

だって、現くんっていつもおとなしくて無関心っぽい感じだけど、

基本的には微かに笑顔を浮かべてるから、悩んだりすることなんてないものだと思っていた。

「……それならもうちょっと、表に出しなさいよ！ まったく現はいつも、のほほんとしてるんだから！ そんなんじゃ、伝えたいことも伝わらないわよ!？」

「……うん、そうだね……」

ほゆるちゃんから、やっぱりちょっと不条理かもしれない怒鳴り声をぶつけられて、現くんはさすがに沈んだ声で答える。

「まったくもう、似た者同士なんだから……」

ポツリと、ほゆるちゃんはなにやらつぶやいていた。

「ま、とにかく、現のほうも微妙な感じよね。なんていうか、わたしたちって、いいように使われてるだけなんじゃない?」

「う……」

続けて放たれたほゆるちゃんの見解に、わたしは返す言葉が見つからなかった。

確かに、そうなのかも……。

考えてみたら撫子さんは最初から、お給料を払わずに仕事を手伝ってもらえて助かるとか、そんなことを言っていたわけだし。なんだか、また揺らぎそうになる気持ち、わたしは懸命に抑える。

「でもっ！ きつと身にはなるよっ！ 頑張ろっっ！」

「そうだね」

「ええ。ファイトあるのみよ！」

『お〜!』

わたしたち三人は、自然と右手を重ねて気合いの声を響かせるの
だった。

翌日の実習も、桜華さんは後ろからついてくるだけ。わたしはゆるちゃんのふたりで協力して配達をこなしていった。

桜華さんはやっぱりなにも言わない。

「ほら、任せたぞ」

最初にたくさんの手紙が詰まった郵便袋を渡されてから、まったく言葉を交わしていなかった。

おまえらで勝手にやれ。

そういうことなのだろう。

べつにいいわ。それならそれで、こっちだって勝手にやるだけだもん。

スカウト実習の残り一週間ちょっとのあいだ、精いっぱい頑張る。決意を固めたわたしたちに、怖いものなんてない。

このまま反抗もせず、配達をこなしていったとしても、桜華さんが評価する以上、実習の結果はいいはずがないだろう。だけど、それでも構わない。

まだ中学校の卒業まで一年半あるわけだし。実習でスカウトされることが決まらなくなったって、一般の就職の人と変わらなくなるだけだ。

そりゃあ、狭き門なのはわかってるけど。

でも、夢を諦めなければきっと、たどり着けるはず。

さすがに桜華さんのいる今の郵便局からは採用されないだろう。

だけど、この地域の郵便局じゃなくても、他の地域だってあるのだ

から。

自分に言い聞かせながら、わたしはほゆるちゃんと協力して、手紙を配達先に届けていく。

と、そこへ、ひとりの女性が声をかけてきた。洗濯物を干している主婦の方だった。

「あら、郵便屋さん。今日もご苦労さまです」

「ありがとうございますっ！」

わたしとほゆるちゃんは、速度を緩め、女性に笑顔で応える。すると背後から、

「そんなことより、早く行け！」

桜華さんの叱責の音がぶつけられた。

「な……！？」

ほゆるちゃんが絶句する。

「ちよつと、そんな言い方ないんじゃないですか！？ 声をかけてくださった人に対しても、失礼ですよ！」

猛然と抗議する彼女の大声に、声をかけてくれた女性も驚いた表情を浮かべていた。

「ふんっ、知ったことか。余計なことをしている時間はないんだ。おまえらはただ、自分の仕事をこなせばいいんだよ！」

突然目の前で展開された、ケンカ腰の言い争い。
女性が驚くのも無理はないだろう。

「あの、えっと、すみません、お見苦しいところを見せてしまって……。それでは、わたしたちはこれで。ほゆるちゃん、桜華さん、行きましょっつー！」

わたしはおろおろしながらも、女性に頭を下げて謝罪すると、ふたりに促して先導するようにその場から飛び立った。

「なんですか、さっきのあの態度は！？ 地域住民との触れ合いも、配達員にとっては大切なことのはずですよ！？」

「ふん、そんなつまらない馴れ合いなど不要だな。ただ迅速に配達すればいいんだ。視線を向けてくる人には、優雅に飛ぶ姿を黙って見せつけてやればいい」

「そ……そんなの、絶対に間違ってます！」

先ほどの女性の家から離れてもなお、ほゆるちゃんと桜華さんの言い争いは続いていた。

すさまじい勢いで食ってかかるほゆるちゃんに、冷めた視線を向ける桜華さんは、こう言い放つ。

「だいたい、いいのか？ そんなに口答えばかりしていると、評価は下がるばかりだぞ？ ま、すでに手遅れかもしれんがな」

「くっ……！」

言い返そうとするものの、ほゆるちゃん言葉は続かなかった。期待できないと覚悟してはいても、せっかくのスカウト実習だから、評価が高いに越したことはないと考えているのだろう。少なくともこの郵便局のデータとしては残ってしまうのだから。もしかしたら全国の他の郵便局にも、データが渡ってしまうかもしれないし。

今回の実習で最低の評価が下されたら、郵便配達員になるのはもう諦めるしかないという可能性もある。

ほゆるちゃんも、まだ夢を諦めたくはないのだ。

「おまえらふたりとも、配達員になることをずっと夢見てきたんだろ？ だったらごちゃごちゃ言わず、オレに従ってればいいんだ。ただ機械のように仕事をこなしていけばいいんだよ！」

嫌だ……！

そんなの絶対に間違ってる……！

撫子さんだって言ってたじゃない！ 夢を届けるのが仕事だつて……！

わたしは心の中で叫んでいた。

だけどその言葉は、口から飛び出していくことはなかった。

すぐ横では、わたしと同じようにうつむき、ほゆるちゃんが唇を噛みしめながら体を小刻みに震わせている。

彼女がわたしと同じ思いを抱いているということ。それだけは、よくわかった。

「失礼します！」

ノックをしてドアを開けたわたしたちは、勢いよく部屋の中に踏み込んだ。

そこは局長室。

局長席に座る撫子さんが、とくに驚いた様子もなくわたしたちを迎えてくれた。

「あらあら。みなさんお揃いで、どうかなさいましたかしら？」

真っ先に踏み込んでいったほゆるちゃん、ドシンドシンと足音を立てながら撫子さんの座るデスクに詰め寄っていき、そして、

バンッ！

デスクに両手を勢いよくついて、彼女の感情の爆発と同様に大きな音を響かせる。

「聞いてください、撫子さん！」

「……はいはい、聞いておりますよ？」

落ち着いた撫子さんの声。ほゆるちゃんとの温度差がすごいけど、とにかくわたしと現くんも、彼女のあとに続いて撫子さんのデスクの前に並び、軽く頭を下げる。

「あの桜華って人、ひどすぎます！ 今すぐ、指導役の人を変えてください！」

「それは、できませんわねえ……」

局長席のデスクに身を乗り出し、撫子さんにツバが飛び散るのではないかと思うほどの勢いで怒鳴りつけるほゆるちゃん。

いや実際、かなり飛んでいたに違いない。

それでも撫子さんは怯んだ様子もなく、淡々と言葉を返してくる。

「局員の人数も、それほど多くありません。とくに郵便配達員は数人しかいないのが現状です。今さら役目を変えるなんてこと、できるわけありませんわ」

「ですが……！」

「あなた方、いったいなにが不満なんですか？」

撫子さんの問いかけに、ほゆるちゃんはそれまでと同じ勢いで答えようとす。

そんな彼女の肩に手を置き、現くんがそれを止めた。

そして現くんはわたしに視線を送る。

……わたしが説明すればいいってことね。

「えつとですね。今まで桜華さんから指導してもらっていただけど、実はいろいろとありまして……」

現くんに促されたわたしは、実習を開始してから今日までのことを、かいつまんで撫子さんに話した。

最初は厳しく、ほんとに罵声を浴びせるくらいの勢いで指導してもらったこと。

それも少し行き過ぎだったと思うこと。

さらにそのあと、わたしたちをいたぶるのにも飽きた、と言って、すべての配達をわたしとほゆるちゃんのふたりに任せるようになったこと。

それからは、ほとんどなんの指導も助言もなくなり、ただ黙ってついてくるだけだったこと。

口を挟まずに頷きながら話を聞いてくれていた撫子さんは、わたしが話し終わると、こう言い返してきた。

「ふふ、随分とひどいですわね。ですが、桜華さんがそんなことをするなんて、わたくしには信じられません。とても優秀な方ですし、勤務態度も真面目で、いつも責任を持って仕事に臨んでおりますわ」

え？

一瞬、撫子さんの言葉の意味が理解できなかった。
そして、

「あなた方がウソをついている、なんて考えたくはないですが……」

ぼそりと、撫子さんはそうつぶやいた。

ギリギリギリ。

ほゆるちゃんが歯を噛みしめる音が聞こえてきそうだった。

「……失礼しました！」

くるりときびすを返し、入ってきたときと同じように足音を響かせて、彼女は局長室を出ていく。

わたしと現くんも、慌てて一礼だけして、そのあとを追った。

「待つてよ、ほゆるちゃんっ！」

わたしの声が届いているのかいないのか、いや、届いてはいるだろうけど、お構いなしといった様子で、彼女は足早に郵便局の廊下をずんずんと突き進んでいく。

と、ほゆるちゃんのすぐ目の前、廊下の曲がり角から、女性が飛び出してきた。

「きゃあっ!?!」

「あっ！」

叫んだときにはもう遅い。

勢い余ったほゆるちゃんは、その人と見事にぶつかってしまった。

しかも女性は、なにかの資料だろうか、たくさん紙束を抱えていて、それを盛大にぶちまけてしまう。

もちろんその女性は、ゆっくりと歩いて廊下を曲がってきただけ。こっちが悪いのは疑いようもない。

「ごめんなさいっ！」

ほゆるちゃん本人よりも早く謝罪の言葉を述べ、わたしは廊下にまき散らされた紙を拾い集める。

すぐに現くんもほゆるちゃんも、同じように屈んで紙を拾い始めた。

「あ……すみません、ありがとございます」

「いえ、こちらの不注意ですから。申し訳ありません」

そうやって声をかけ合っていると、

「あら？ あなたたち、スカウト実習に来てる子よね？」

女性は改めてわたしたちの姿を見回し、そう訊いてきた。

「あ、はいっ、そうですっ！」

「そっかあ。大変よね、あの人の指導じゃ」

「……え？」

「あの桜華さんって人、ひどいでしょ？」

わたしたちは、不意にかけられた優しい言葉に、同じ志を持つ仲間を得たような、そんな気持ちを感じていた。

散らばった紙を拾い集めながら、わたしたちは女性から話を聞いた。

桜華さんは郵便局内でも有名な存在だった。

……案の定、悪い意味で。

人数の少ない配達員として採用された彼女は、他の局員さんたちを見下す傾向にあり、ろくに挨拶もしないという。

しかも普段から高圧的な物言いで、年齢的にも若く、まだ新人の域を抜けていないというのに、年配の局員さんの言葉にも耳を傾けない。

そういった部分の仕事に対する情熱から来ているのなら、まだ我慢できる範囲内ではあっただろう。

でも桜華さんはわたしたちがここ数日で見えてきたのと同じ、つまりはすごく適当な感じで、仕事に対する情熱なんてカケラも感じられないと、この女性も思っていたようだ。

あんな人にお給料をが支払われているなんて許せないと怒っている人も、どうやら少なくないらしい。

「……やっぱりあの女、ひどすぎるわね！」

ほゆるちゃんは怒りをあらわにしていた。

呼び方もすでに、「あの桜華って人」から「あの女」に変わっているし。どれほどご立腹かが伝わってくる。

そこへ、ひとりの男性局員さんが通りかかった。

「キミたち、大丈夫かい？ それは資料かな？ 散らばっちゃって

るね。ほくも拾うの手伝うよ」

「あ……ありがとうございますっ！」

男性はすぐにその場にしゃがみ込むと、わたしたちと一緒に紙を拾い集めてくれた。

新たな人が加わっても、ほゆるちゃんの怒りは静まることなく、

「あゝ、もう、考えれば考えるほどムカつくわね、あの女！」

誰にともなく、ぶつける先のない言葉を吐き出していた。

「どうしたんだい？」

「ええ、実は……」

状況のわかっていない男性に、女性社員さんが簡潔に説明する。

「なるほどね、確かにあの人、ひどいもんなあ」

男性も、わたしたちの味方だった。

というよりこの様子だと、桜華さんはきつと、局長である撫子さん以外には認められていない立場なんじゃないだろうか。

そう考えると、なんとなく桜華さんが不憫に思えてくる。

でも、仕方がないよね。あんな態度で仕事をしてるんじゃない。

桜華さんに対する愚痴を吐き出し続けながらも、手はしっかりと動かし、女性が落とした紙をすべて拾い集め、もとどおりに重ねることができた。

ちょっと、重ねすぎじゃないかな、って思うくらいの量。女性社員さんは、最初から無理して運んでいたのだろう。

だからほゆるちゃんと軽くぶつかっただけで、全部ぶちまけてしまったのだ。

その紙の束を再び抱えようとしていることに気づいた男性が、

「ぼくも持つのを手伝うよ」

と、上半分の束を持ち上げる。

「ありがとうございます」

「これ、事務室に持っていくの？」

「はい、そうです」

お礼を言う女性に質問する男性局員さん。

そして、その男性はわたしたちのほうに向き直ると、こう提案してくれた。

「あっ、そうだ。キミたち、よかつたら一緒に事務室まで来ないかな？ 他の人にも話を聞くといいよ。もう定時は過ぎてるから、きつとご本人は帰宅済みだろうし、遠慮なく喋ってくれと思うよ」

わたしたちは顔を見合わせると、すぐに頷き、そのお言葉に甘えることにした。

もちろん三人とも、半分ずつになってはいたけどまだ重そうだった紙束の一部を受け取り、運ぶのを手伝った。

事務室に着いて紙束を目的の場所に置くと、男性局員さんがわたしたちを他の局員さんに紹介してくれた。

すでに定時は越えていたけど、残業している人も多いみたいだった。

「あゝ、桜華さんね。ほんっと、ひどいと言いたいようがないわよね！」

「そうそう。このあいだだって、こっちが残業してるってのに、あの人さっさと帰ってたのよ！ 急ぎの仕事があったから、少しだけでも手伝ってほしかったのに！」

「おれたちのことも、なんかバカにしたような態度だよな、いつも」「それ、言ってるな！ 自分は花形の配達員だから、事務関連のつまらない仕事なんてできない、って感じなんだろうな」

「こっちから話しかけても、小バカにしたように笑ってそのまま去っていくのよ、あの人！ あゝ、もう！ 思い出しても腹が立つわ！」

局長さんたちから話を聞き始めたら、出るわ出るわ。

相当うつぶんが溜まっていたのか、桜華さんへの不満が次から次へと飛び出してきた。

もちろんほゆるちゃんもそれに混じって、桜華さんへの不満を叫びまくる。

なんかほゆるちゃんって、叫んでるときが一番活き活きとしてい

るよな……。
それはともかく、ひとしきり不満を唱え終わったあと、局長さんたちは、

「桜華さんのもとで実習だなんて、ほんと災難よね」

「でも、わたしたちがついてるわ！」

「そうそう。いつでも相談に来てくれていいよ！」

「あんな人に負けないで、頑張ってね！」

と優しく応援の声をかけてくれた。

桜華さんからひどい言葉を受けたり、逆に放任されたり、さらには局長である撫子さんにまでウソつき呼ばわりされたりして、この郵便局に来たことにすら、後悔の念が湧き上がり始めていたけど。

ここにスカウト実習に来て一週間、初めて温かく迎え入れてもらえたわたしは、ようやく笑顔を取り戻すことができた。

わたしの隣では、ほゆるちゃんもやっとな怒りを静めて、微かに笑みを浮かべていた。

その翌日は土曜日。

郵便局はお休みなので、スカウト実習もお休みだった。ただ、学校では女子魔道部の練習が毎日あるはずだ。

スカウト実習に参加しているあいだ、わたしたち三人は、部活への参加を免除されている。

だから学校に行く必要もなかったし、実習の疲れもあるわけだから、家でゆっくりと休んでいてもよかったのだけだ。

でもわたしは、ほゆるちゃんや現くんと相談して、部活に顔を出そうと決めていた。

いつもどおりにわたしを家まで迎えに来てくれたふたり。

いつもどおりに寝坊して約束の時間ギリギリだったわたしが、支柱のエレベーターで下りていくのを待っていてくれた。

遅いわよ！ と、いつものようにほゆるちゃんから怒鳴られながらも、学校へと向かって歩き出す。

わたしたち三人が学校に着くと、校庭にはちらほらと練習をする体育会系の部員の姿が見えた。

授業がない分、多くの時間を費やせる夏休みとはいえ、さすがに土日は休みにしている部が多いみたい。

真夏だし、とくに外で練習するような部の場合、健康面への配慮もあるに違いない。

だけど女子魔道部は、わたしたち二年生がスカウト実習で頑張っているからか、土日も休まず活動し、練習を強化しているようだ。

もっとも、わたしたち三人がいなくなると、笹枝先輩と一年生

ふたりの三人だけってことになるのだけど。

校庭から空を見上げると、ホウキで飛ぶ三人の姿が見えた。

「やってるやってる。今日は高飛びの練習っぽいわね」

「そうだね。せっかくだし、ちよっと見学しようか」

「でもでも、わたしたちも参加しなくて、いいのかなあ？」

わたしたちがそんな会話をしているあいだに、笹枝先輩はこちらに気づいたようで、

「あら、二年生たちじゃないの！」

と、喜びをいっばいに浮かべて、空から下りてきてくれた。

それに合わせて、一年生のふたりも下りてくる。

「そっか、郵便局だもんね、土日は休みだっけ。でも、よく来てくれたわね。うん、今日の練習はここまでにして、話を聞かせてもらいましょうー！」

笹枝先輩の提案で、わたしたちは部室へと向かった。

真夏の練習で汗だくになっていた先輩と一年生ふたりだったけど、タオルで拭って部室へと入り、魔女服から制服へと着替える。

現くんを含めたわたしたち二年生三人は、先輩たちが着替えるのを待ってから部室に入った。

普段の部活だと、マネージャーの仕事ってことで脱いだ魔女服を現くんが洗いに行くところだけだ。

今日の現くんは部活への参加が免除されている身だから、さすがに笹枝先輩もそんな指示はしなかった。

いつものことだからか、現くんは魔女服を受け取るうとしていたけど。

なんか、根っからのマネージャーになっちゃってない？

このところの実習でも、どうやら撫子さんのお茶くみ係とか肩もみ係とか、そんなことをやらされているみたいだし……。

それはともかく、部室の中は結構蒸していた。

クーラーなんてもちろんない。窓を全開にして、どうにか風を取り込む。

部室にある唯一の冷房器具、扇風機を回してはいたけど、生温かい風が循環しているだけのようには思えなかった。

「それで、どうしたの？ 家でゆっくり休んでいてよかったのに、わざわざ来たってことは、なにかわけがあるんでしょ？」

席に着いた笹枝先輩は、制服の胸もとを微かにパタパタと揺らし、風を送り込みながら、そう問いかけてきた。

問いかける、というよりも、詰問、と言ったほうがいいのかもしれない。

メガネの奥から見つめてくる笹枝先輩の瞳は、じっとわたしを捉えて離さない強さをたたえていた。さすが部長さんといったところか、わたしたちの気持ちの揺らぎを、すぐに感じ取ってくれたようだ。

でも、どうしたものか。

わたしはチラリと、一年生たちに視線を送る。

女子魔道部の部員は、みんな郵便配達員に憧れている。それは、まだ幼さの残る無邪気な一年生たちふたりにしても、もちろん例外ではない。

今日わたしたちが来たのは、スカウト実習でのことを笹枝先輩に相談してみるためだ。

去年の先輩も同じような感じだったのか。

もしそうなら、わたしたちは三人だけど、先輩はひとりだったのに、どうやって乗り越えたのか。

同じような状況じゃなかったとしても、なにかアドバイスをもらえるかもしれない。

笹枝先輩は、わたしたちにとって頼れる先輩だから。

だけど、一年生たちにそんな話を聞かせてしまっていていいものだろうか……？

彼女たちの夢を壊してしまうような結果になったら、こちらとしても心苦しい。

そう考え、なかなか言葉にできないでいたわたしの気持ちを、鋭い笹枝先輩はしっかりと汲み取ってくれた。

「そっか、まだスカウト実習の途中だものね。もしかしたら一年生は来年実習を受けるかもしれないし。通例として、実習内容をあらかじめ教えてはいけないことになってるから、彼女たちには話せないわね。スカウト実習の話が来ても受ける気がないなら、べつにいけど。……あなたたち、どう？」

「え……スカウト実習は、参加させていただけなら参加したいです！」

「はい、わたしも同じです！」

笹枝先輩の言葉に、素早く答える一年生ふたり。

「よし。じゃ、今日の部活はこれで終了。あなたたちは帰っていいわよ」

スカウト実習のことが聞けると思ってた期待いっぱいだった彼女たちは残念そうな顔をしていたけど、参加できなくなるとまで言われたら、素直に帰るしかないだろう。

素早く帰り支度を整えると、彼女たちは挨拶の声を残して部室から出ていった。

そしてわたしたちは、笹枝先輩に桜華さんの指導のことを話し、先輩も去年、こんな感じだったのか尋ねてみた。

先輩から返ってきた答えは、ノー。

去年はまだ局長になっていなかった撫子さんから、丁寧に手取り足取り指導してもらったという。

「ちょっと過保護すぎるくらいの指導だったけどね」

肩をすくめながら、そうつけ加えていたけど。

ともかく、笹枝先輩のときは、そんなにひどくなかったのだとわかった。

「先輩、わたしたち、どうするべきなんでしょう？」

わたしは率直に、悩みを口にする。

ほゆるちゃんも同じことを訊きたかったのだろう、真剣な眼差しで笹枝先輩の答えを待っていた。

現くんだけは、いわば去年の先輩と同じ状況だから、適切なアドバイスをもらえる可能性がある。

でも、さつき先輩が言っていた、「実習の内容を教えるはいけないう」というのが、一年生を帰らせるためのまかせでなかったとしたら、なにも答えてはもらえないかもしれない。

そう考えているからか、それともいつもどおりに無関心なだけなのか、現くんはなにも言わなかった。

わたしの質問を聞いた笹枝先輩は、しばらく考え込んでいるようだったけど、やがてゆっくりと口を開いた。

「……やっぱり、わたしからはなにも言えないわ。自分たちで悩んで、考えることね」

役に立てなくて、ごめんなさい。

ポツリとつぶやいた笹枝先輩は、それ以上この件に関してなにも言ってはくれなかった。

重苦しい沈黙の時間。

お開きにしましょうか。先輩の言葉に、黙って頷くわたしたち。

「……頑張ってね」

部室にカギをかけて帰る間際に、ただひと言だけ、先輩はそう声を送ってくれた。

翌日の日曜日、わたしは自分の部屋にこもって一日中考えた。

やっぱり、今はなにがあっても、歯を食いしばって耐えるしかない。

そう結論づけ、明日から始まる残り一週間のスカウト実習に臨む決意を固めた。

ただ、週が明けて実習が再開されても、やっぱり桜華さんの態度は相変わらず。

仕事をわたしたちに任せるだけの彼女に、ほゆるちゃんは何文句もぶつけていたけど、

「ふん。おまえらに、憧れの配達員の仕事をやらせてやってるんだ。不満なんてないだろう?」

と、涼しい顔で言い返されるだけだった。

笹枝先輩、わたしたちは本当に、このままでいいのでしょうか？

泣きついてもう一度質問したいくらいだった。

それにわたし自身、本当にこんな仕打ちを受けながらも、郵便配達員になりたいと胸を張って言えるのか。

迷いを抱えながらの飛行は、優雅とはほど遠い、ふらふらと覚束ないものとなっていた。

こんなじゃダメ。しっかりしなきゃ。

そう思っただけでも、優雅に飛ぶことを考えられる余裕なんて、

わたしにはまったくなかった。

ひたすら悩みながら飛び続けるだけの練習は、心をきつく締めつけるばかりだった。

「うむ……」

なんだか桜華さんが唸っていた。

これまでの流れだと、問答無用で郵便袋と配達先のリストを渡して、早く行け、と命令されるところなのに。

「あの……どうしたんですか？」

わたしはおずおずと質問してみる。

桜華さんはしばらく黙っていたものの、

「……いや、なんでもない。ほら、今日分だ。さっさと行っていい！」

郵便袋と配達先リストをわたしたちに渡し、そつ言い捨てた。

って、あれ？

「行ってこい？」

思わずオウム返しに繰り返してしまっわたし。

「そつだ。今日はおまえらふたりだけで配達に行くんだ」

「それって……」

桜華さんがわたしたちのことを認めてくれた……？

いや、昨日までの彼女の態度からすると、それはありえないだろう。

とすると……。

「あたしたちに仕事を押しつけて、自分はどこかで休んでるつもりですか!？」

さすがに我慢ならなかったのだろう、ほゆるちゃんは桜華さんを怒鳴りつけた。

だけど桜華さんはやっぱり涼しい顔で言い返してくる。

「口答えは許さん。おまえらはオレの言うことを黙って聞いていればいいんだと、何度言わせるつもりだ。だいたい、実習の段階で憧れの配達員の仕事を任せてやるって言ってるんだぞ? 感謝してほしいものだな」

「でも……!」

納得のできないほゆるちゃんは、負けじと言い返そうとするも、言葉が出てこない。

どちらにしても、桜華さんを口で打ち負かすのは、相当難しいだろう。

ただ、わたしはあることに気づいた。

「あの、すみません……」

口答えだと思われるのを恐れ、わたしは控えめに声を挟む。

「なんだ? おまえも不満があるのか?」

案の定、攻撃的な言葉が返ってきたけど、わたしは怯まずに意見を述べた。

「わたしもほゆるちゃんも、ホウキの免許、持ってないです。まだ中学生ですし……。指導する人がついてないのにホウキで飛んだら、法律違反になるんじゃないでしょうか？」

そう、今までの実習では、桜華さんが一緒に飛ぶからこそ、問題なくホウキに乗ることができた。

「ただどわたしたちは無免許だ。」

ホウキの免許が取得できるのは十五歳以上で、中学校在学中は受けられないことになっている。

中学生のわたしたちは、どんなに免許がほしくても、取得することはできないのだ。

わたしたちについてこなかったら、指導する立場である桜華さん自身も罰せられてしまうはず。

きっと桜華さんは、周りの配達員さんたちがみんなホウキ免許を持っていることで、それがあたりまえみたいな感覚になっていたに違いない。

そう考えていたのだけど。

「なんだ、そんなことか」

「え？」

「すでに許可は取ってある。だから問題ない」

呆然としているわたしに、桜華さんはそう答えた。

許可を取ってあるって……。用意がよすぎない？
眉をひそめる。

それに、申請すれば免許なしでもホウキで飛んでいいなんて法律、

あつたつけ……？

法律について明るくないわたしには、いくら考えを巡らせたところで、答えなんか出てこないのだけど。

「ぐずぐずしてると、配達が終わる前に日が暮れてしまっぞ？ 早く行け！」

そんなトゲのある言葉を受け、わたしとほゆるちゃんはホウキに腰を落とし、大空へと飛び立つ。

わたしはちょっと納得のいかない思いを抱えたままではあつただけど。

「ほゆる、夢愛ちゃん、頑張つてね」

ずっと黙って見守っていた現くんが、わたしたちにエールを送ってくれた。

その声を聞くだけで、わたしの心は穏やかになるから不思議だ。

こうして、現くんの微かな笑顔と、腕を組んで偉そうにふんぞり返っている桜華さんを背に、わたしとほゆるちゃんはふたりだけでの配達へと向かうことになった。

風が清々しい。

晴れ渡る青空は、わたしたちの心を映し出しているかのようにも思えた。

優雅にゆつたりと空中住宅のあいだをすり抜けていく、わたしとほゆるちゃん。

窓やベランダから顔を出す人に会釈をしたり挨拶を交わしたりしつつ、リストの上から順番に配達していく。

なんの問題もなく配達をこなし、桜華さんもないことで軽やかな気持ちに包まれていた。

ほゆるちゃんとふたりで、楽しくお喋りしながらの配達。

もちろん、優雅に飛びつつも、なるべく速く飛ぶ必要はあるのだけど。

それでもほゆるちゃんとふたりだけだと思つと、心に羽根が生えたみたいに、気楽で気ままな空の旅となっていた。

「空を飛ぶのって、やっぱり気持ちいいね、ほゆるちゃんっ!」

わたしは絶えることのない笑顔をこぼしながら、すぐ横を飛ぶほゆるちゃんに話しかける。

と、彼女は配達先が書かれた紙とにらめっこしていた顔を上げ、わたしのほうに向き直った。

「あんたもちゃんと働いてくれたら、あたしはもっと気持ちいいんだけどね」

「はっ、ごめんなさい」

いきなり浮かれた気分には水を差されたわたしは、素直に謝りの声を返す。

配達先の住所を見てその場所まで先導するのは、ほゆるちゃんの役目となっていたからだ。

だってわたし、方向音痴なんだもん……。

……もし郵便配達員になれたとしたら、とつても問題ありかもしれないけど……。

だからといって、べつにわたしはサボっているわけじゃない。

たくさんの手紙や小型の郵便物が入った郵便袋は、わたしのホウキの先にくくりつけてあるのだから。

大きな郵便物や小包なんかは、さすがにホウキで運ぶのは大変だから、魔法の車を使う配達班の仕事となっている。だから郵便袋には、それほど大きな郵便物が入っていない。

とはいえ、たとえ小型の郵便物や手紙類しか入っていなくても、郵便袋は結構な重さになってしまう。

もともと飛行技術が劣るわたしは、何度もふらふらとバランスを崩したりしていた。

しっかきくくりつけてあるから、落つことしたりなんてしないけど。

それでも、ほゆるちゃんに迷惑がかかっているのは確かだろう。そんな思いもあるからこそ、素直な謝罪の言葉は、すぐにわたしの口からこぼれ落ちたわけだけ。

「いいってば。謝ることじゃないでしょ。自分のできることを分担してるだけだし」

「ほゆるちゃん……」

やっぱり彼女は紛れもなくわたしのお友達だ。
というか親友だよね。

……ただ、さらに恋のライバルでもあるかもしれないけど……。
不意に現くんの顔が思い浮かんで、わたしはそんなふうに考えて
いた。

そうしたら、

「わたしも桜華さんがいなくて、清々しい気分だし。でも、夢愛が
気持ちいいのは、さっきの現の笑顔があったからなんじゃないの？」

ニヤニヤといやらしい目を向けながら、ほゆるちゃんがそんなこ
とを言ってきた。

わたしは頭の中をのぞかれたんじゃないかと思って、びっくりし
たけど。

もちろんそんな超能力、ほゆるちゃんにはない。ただ、わたしは
思っていることが顔に出やすいらしく……。

「なによ、凶星？ ま、そうでしょうね、あんたは。でさ、実際
のどこ、どうなの？ 進展してるの？」

目を丸くしたまま表情が固まっていたわたしに、ほゆるちゃんは
続けざまにそう質問してきた。

え？ え？ え？ 進展って……？

そりゃあ、顔に出やすいつてのは確かだと思うから、わたしが現
くんを、その、ちょっと気に入ってるというか、気になってるって

気づかれていても不思議じゃないけど。

「だけど、現くんとほゆるちゃんって幼馴染みで、いつも楽しそうに話してて……。」

わたしの家に迎えに来るまで一緒に歩いてきて、帰りは帰りてわたしを送り届けたあと、ふたりで一緒に歩いて帰ってて……。

昔から家がお隣同士なのは知ってるけど、本当の家族みたいに仲がよさそうで……。

だから、その、お互いに好き合っていて、わたしなんか割り込めるはずないって思ってた……。

わたしがなにを考えているのか、今度は完璧に顔に出してしまったように。

手に取るようにわたしの心を捉えたほゆるちゃんは、慌てた声でこう答えた。

「なに？ あたしはべつに、単なる幼馴染みなだけだからね？ だいたい現のこと、こゝんな小さい頃からずっと知ってるのよ？ 今さらなんとも思わないっての！ 現のほうだって同じよ！」

「そ……そうなの……？」

「そうそう。っていうか夢愛、もしかしてあたしに遠慮とかしてたわけ？ ばっかね、全然関係ないってのに！ 鈍い鈍いとは思ってたけどさ。ま、現も鈍いからお似合いではあるかもね！」

「は……は……は……。」

ほゆるちゃんは矢継ぎ早にわたしを攻め立てる。

「そっか、ほゆるちゃんは、べつに現くんのこと、好きってわけじゃないんだ……。」

「……本当に……？」

「安心した？」

「……………」

ニコニコ顔で問いかけてくる彼女に、わたしはなんて答えていいかわからなかった。

だって、安心したって答えるのも、なんとなくだけど、ほゆるちゃんに悪いような気がしたから……。

「ま、あたしも現がなにを考えているのか、よくわかんないけどさ。きつと夢愛のこと、意識してると思うわよ。現ってどんなものに対しても、やけに無関心なの、知ってるでしょ？ それなのにあんたのことは、明らかに気にかけてるみたいだし」

「そ……そうかな……？」

でもそれなら、ほゆるちゃんのこととは、もっと気にかけてると思うよ？

わたしは、のどもとまで出かかったその言葉を、口にするこなく呑み込んだ。

今は、あまり進展したいとか、その……恋人になりたいだとか、そんなことまで考えなくてもいいや。

三人の関係が崩れてしまうのも、怖いから。

……臆病すぎるのかもしれないけど。

「やっぱりほら、現くんって女子魔道部のマネージャーだしっ！だから気にかけてくれてるだけだよっ！ そんなことより、速度が落ちすぎてるよっ！ ほゆるちゃん、今は配達をしっかりと頑張ろうっ！」

わたしは元気いっぱいに声を上げ、笑顔を浮かべる。
そんなわたしに、ほゆるちゃんも微笑み返してくれた。

「そういえば、さっきの桜華さんの言葉、どう思う?」
「ほえっ?」

配達を続け、しばらく経ったあと、ほゆるちゃんがふとそんなことを言い出した。

あまりに唐突だったため、わたしはなんだかマンガちっくな返事をしてしまった。

「わたしたちだけで配達させることよ。ホウキに乗るのも許可を取ってあるって言ってたでしょ?」

「うん、そうだね。そのおかげで、こうしてふたりで楽しく配達できて、感謝だよねっ!」

今日はずっとも清々しい気分配達できている。

それもこれも、ホウキに乗る許可まで取ってくれた桜華さんのおかげだと、わたしは本気で思っていた。

だけどほゆるちゃんの考えは全然違っていたみたいで。

「ばっかね。なんでそう善意に受け止められるのよ、あんたは。どうせ自分がサボりたいだけに決まってるんだから、感謝することじゃないわ!」

呆れた様子で頭に血を上らせていた。

「それにさ、その許可を取ってあるってのだって、怪しくない?もしかして本当は許可なんて取ってなくて、あたしたちを無免許飛行の罪に陥れようとしてるとか……」

怒りに身を任せて、言いたい放題のほゆるちゃん。
さすがにちよつと雲行きの怪しい話になってきたから、わたしは慌てて彼女の言葉を遮る。

「それはないでしょ？ だつてさ、桜華さんがわたしたちの指導をしてるのは、郵便局の人たちも知ってるんだから。もしわたしたちが無免許飛行で配達をして捕まったとしたら、桜華さんだって罪になっちゃうでしょ？」

「……それもそうね。知らなかったじゃ済まされないでしょうし」「そうそう。大丈夫だよ！ だからさ、せつかくだし楽しくお喋りしながら配達して、空の散歩を満喫しようっ！」

わたしの提案に、

「……散歩って言えるほど、のんびりもしていられないけどね」

軽くツツコミを入れながらも、ほゆるちゃんは笑顔を取り戻していた。

夕陽が辺りを赤く染め上げ始めた頃。

「あれ？ なによこれ!？」

ほゆるちゃんが驚きと怒りの入り混じったような声を上げた。

「ほえっ？ どうしたのっ？」

わたしは首をかしげながら、彼女が睨みつけている配達先リストに目を向ける。

「これよこれ！ 配達は今で最後なんだけどさ、この配達先、ここからだ完璧に反対方向になるじゃない！」

「あ、ほんとだっ」

配達先リストは、コンピューターが計算した配達に効率のいい順番になっていると、前に桜華さんが言っていた。

にもかかわらず、これは完全に違っているようで……。

コンピューターのミス？ それとも入力した人のミス？

そんなの、この際関係ないよね。

「うわっ、しかもこれ、腐敗大地のすぐそばじゃない！」

郵便配達員さんたちには、それぞれ担当区域が与えられていて、わたしたちは桜華さんの担当区域を手伝っているわけだけど。

確かにリストに記された住所は、ぎりぎりの端っこではあるけど、担当区域内だった。

ただ、わたしたちの住む居住区域の端っこでもあるその地域は、腐敗した土地と隣り合わせの場所だった。

腐敗大地からは、悪性のガスが噴出しているとも言われる。

いくら隣り合った場所とはいえ、居住区域として人が住んでいるのだから、そういったガスの心配はないと思うけど。

それにしあって、やっぱりイメージというものがある。

普通の居住区域に住む人たちはみんな、腐敗した土地や海なんかに近づかないようにしている。

さっきのほゆるちゃんという言葉からも、そんな場所にまで行きたくない、という思いがひしひしと感じられた。

彼女の場合、どちらかといえば、もう日も沈むのにこんな場所まで行ったら帰りがすごく遅くなるから嫌だ、っていう気持ちのほうが強いのかもしれないけど。

それでも、お手伝いとはいえ仕事だし、一応これでも実習を受けている身、放り出すわけにもいかないだろう。

ミスを指摘しようにも、郵便局に一旦戻るのだから、目的地とあまり変わらないくらい距離があるし。

だいたい担当区域内なのだから、郵便物は早く届けるべきだ。

この手紙を、心待ちにしているかもしれないのだから。

わたしはホウキの先にくくりつけた郵便袋から、最後に残っていた一通の手紙を取り出した。飾りっ気のない真っ白な封筒に、宛先と差出人の名前や住所が書かれてある。

確かに配達リストに載っている住所だった。

うん、お手伝いではあっても、将来は配達員を目指そうと思ってるんだもん。ここはしっかりとお届けしなくちゃ。

わたしは手紙をぎゅっと握って決意を固める。

でもその瞬間、

「ちょっと、折り曲げたりしないでよ？ それに、落としたりしたら絶対にダメなんだからね？」

ほゆるちゃんから注意されてしまった。

うっつ……、わたしってそんなに、頼りないのかなあ？

「だ……大丈夫だよっ！」

ぶんすかと頬を膨らますわたし。
と、そのとき。

ブオオオオオオオオツ！

突風が吹き荒れる。

「あっ、髪が乱れちゃっつ！」

そんなに注目されてるわけではないとは思っけど、やっぱり女の子だし、身だしなみは気になってしまうものだよね。
などと髪の毛を気にしていると、

「夢愛、ちゃんと手紙は持ってる！？」

ほゆるちゃんも必死に髪と配達リストとスカートを押さえながら
叫ぶ。

あ、わたし、スカートのこと気にしてなかったっ！

と、それはまあ、この際べつにいいとして。

「大丈夫だよ、ほらっ！ 大切なお客様のお手紙だもん、しっかり握ってるよっ！」

そう答えて、わたしは右手に持った手紙を高々と掲げる。

……ちよっと、折り目とかはついちゃったかもしれないけど、わたしはしっかりと手紙をつかんでいた……のだけ。

バサバサバサバサッ！

激しい音とともに、突然視界が真っ暗になる。

「きゃっ、なにこれっ!？」

「ちょ……、なによ……! すごい大群……!」

それは、たくさんの鳥たちだった。

風に乗って飛ぶ鳥たちの群れ。どうやらその飛行ルートに、わたしたちは飛び込んでしまったみたいだった。

最初は驚いて恐怖すら感じたけど、ただの鳥だとわかったわたしは、落ち着いて鳥の群れから抜けられるように高度を下げてみた。

うん、大成功っ！

見事わたしは、鳥の群れから脱出していた。

すぐ横には、ほゆるちゃんも並び、災難だったと愚痴をこぼす。

と。

「ちょっと夢愛、手紙は!？」

「……あれっ、ないっ!？」

わたしの右手から、しっかりと握っていたはずの手紙が消えていた。

きよろきよろと見回すと……。

「あ……あつた!」

指差した先には、鳥たちの群れ。

そしてそのうちの1羽のくちばしに、さっきの手紙がしっかりと

くわえられていた。

「きゃ〜〜〜、待ってえ〜〜〜!」

「こら、鳥〜! その手紙を離しなさい!」

必死に追いかけるわたしとほゆるちゃん。

だけど、鳥さんが待ってくれるはずもなく。

鳥さんたちの飛ぶ速度は決して速くはなかったのだけ。

ただ、手紙をくわえた鳥さんは、群れの真ん中辺りにいた。

ここは意を決して、群れの中に飛び込むしかないのかも。

でも、わたしたちが大声を出しているからなのか、どうもさっきから鳴き声を上げて威嚇してきているような……。

たまに群れから少し外れた鳥がわたしたちのそばまで近づき、くちばしでつついてきたりもしているし。

明らかに敵意を向けて、わたしたちを警戒しているみたいだった。

そんな群れの中に入ってしまったら、どうなってしまうのか。

考えただけで背筋が凍る。

どうしたもののやら困り果てていると、不意に群れの中からなにかが落下していった。

「あっ、手紙、落っこしたよっ!」

「わかってるわ! 追いかけるわよ!」

「うんっ!」

わたしとほゆるちゃんは、ホウキにまたがり、急降下を開始する。緊急事態だもん、足を横に揃えて優雅に飛ばないなんて言っ

いられない。

空気抵抗を減らし、集中力を高め、ひらひらと宙を漂う手紙に狙いを定める。

だけど、近づいてキャッチしようとしても、手は空を切るのみ。不規則な舞い方をする手紙に、わたしたちのほうで翻弄される。

しかもこっちはふたりばかり。

焦っているわたしたちは、小さな目標を捕獲するのに、ふたりがそれぞれ闇雲に突っ込むことしか考えず。

ニアミス程度は可愛いもので、あわや正面衝突といった状況にさえ、何度も陥っていた。

「くっ、ふたりがかりじゃ、余計に難しいわ！ あたしは下に先回りするから、あんたは手紙を追って！」

「あいあいさっ！」

わたしはなぜか、とっさに敬礼していた。

ほゆるちゃんはずぐに、ものすごい勢いで急降下していく。その先には、湿った濃い茶色の大地が見えていた。

わたしたちはもうすでに、腐敗大地の上空まで到達していたのだ。

あまり近づいたことはないけど、なんというか、大地というよりも沼とか泥とか、そんな感じに見える。

このまま落ちてしまったら、大切な手紙が汚れてしまう。

それに、ここからだとはよくはわからないけど、もし沼のようになっているのなら、水面に落ちて水を吸った手紙は、そのまま簡単に沈んでしまうだろう。

そうなら万事休すだ。

ともかく、こっちは頑張って手紙をつかむことだけに集中しよう。
わたしを嘲笑うかのように、ひらひらと空中をあっちこっちと飛び回る手紙。

狙いを定めて……スカッ！

もう一度……スカッ！

今度こそっ……やっぱりスカッ！

何度手を伸ばしても、簡単にかわされてしまう。

やるな、手紙っ！

……なんて言ってる場合じゃないってば。

眼下には、腐敗大地がどんどんと迫ってくる。

ここまで近づいてみると、どうやら本当に、泥沼のような状態みたいだった。

ということは、絶対に落としてはならないってことっ！

だけど。

スカッスカッスカッスカッスカッスカッ！

いくら手を出そうとも、スカスカスカスカ。

と、地面……というより水面とでも言うべき深い茶色の一帯から少し上がった空中に、悠然と浮遊して待ち受けるほゆるちゃんの姿が、わたしの目に映り込んできた。

落ち着いて落下してくる軌跡を見極め、一点集中でキャッチする。そういう心づもりなのだろう。

あたしに、任せなさい。

うんっ、頑張っつ！

瞳で語り合う、わたしとほゆるちゃん。
そして。

スカッ！

一点集中で繰り出されたほゆるちゃんの手は、もの見事に空を切った。

「うわわわあ~~~~！ ダメダメダメえ~~~~！」

わたしは汗をたら〜と垂らして固まっているほゆるちゃんの横をすり抜け、手紙に向かって突進する。

どうにか手を伸ばしてつかむつもりだったのだけど。

そんな余裕なんてないことに気づく。

もう水面すれすれというところまで来ていた手紙を見て、わたしは最後の手段とばかりにそのまま突っ込む。

わたしたちをもてあそんでくれた手紙は、バッチリわたしの顔面に貼りついたっ！

バシッ！

その手紙を、思いっきり右手で押さえつける。

勢い余って顔面がすごく痛かったけど、そんなことを気にしてもしられない。

わたしは手紙を……しっかりとつかんだ！

「やったあ〜！ ほゆるちゃん、やったよっ！」

と叫んだ瞬間。

グラッ……。

「ふえっ？」

バランスを崩したわたしは、バシャー……ンと大きな水しぶき、というか泥しぶきを立てて、泥沼状の腐敗大地に落っこちてしまっていた。

「きゃわわわっ！ ごぼっ！ たす……けて……ごぼっ！」

わたし、泳げません。

死を、覚悟しました。

だけど、右手をしっかり上げていたからか、手紙は無事の様子。

「夢愛、大丈夫！？ つかまって！」

ほゆるちゃんが手を差し伸べてくれた。

わたしは死にも狂いで彼女の手にすがりつく。

焦りまくっていたとはいえ、それは完全に大失敗で……。

「わっ、こら！ ちょっと、暴れないで……きゃあっ！」

バシャー……ン！

ふたつめの泥しぶきが、再び盛大に舞い上がる結果となってしまうた。

そのあと、必死にもがいてあがいてホウキにつかまったわたしたち。

泥沼から体を引き抜き、体勢を整えて飛び上がり、どうにかこうにか難を逃れたわけだけど。

届けなくてはいけない手紙は、もう完全に泥まみれになってしまっていた。

「はう〜……泥まみれ〜……」

「でも夢愛、あの状態でよく離さず持ってたわね！ でかした！」

手紙をまじまじと眺めながら、涙目になって呻き声を上げるわたしに、ほゆるちゃんはそう賞賛の言葉を向けてくれた。

「ただどべつに、わたしは意識して手紙を離さなかったわけではななくて……」。

「溺れる者はワラをもつかむ……」

「あ〜、なるほど……」

つぶやいた言葉に納得顔のほゆるちゃん。

「冷静に考えればちゃんと、そんなのにつかまっても助からないってわかるけど〜……」

ぐすつ。

わたしは鼻をすすって訴えかける。

さっきは必死だったから……。

結局そのあと、ほゆるちゃんの腕をつかんじやって、巻き込んでしまったってのもあるし……。

勝手に涙がわたしの瞳を濡らしていく。

それを見たほゆるちゃんは、すぐに優しい言葉をかけてくれた。

「あゝ、いいってば。泣くな泣くな！ とにかく、離さないでくれて助かったわ。よくやった！ 夢愛、偉い！」

「えへへへへ」

単純なわたしは、途端に笑顔になる。

「まったくもう、お子様なんだから……」

ほゆるちゃんは呆れ顔と微かな笑顔が入り混じったような表情で、そうつぶやいていた。

「だけど、どうしよう……」

そろそろ夕陽も沈み、宵闇が迫ってくる中、わたしとほゆるちゃんは静かに空を飛んでいた。

手紙は、失くさずには済んだものの、泥まみれになってしまった。それに加えて、当然ながらわたしたちは制服も手足も泥だらけ。顔や髪の毛にだって、大量の泥がこびりついていた。

もちろん着替えなんて持ってきていない。

だけど、もう日も暮れているし、一旦郵便局まで戻って着替えて

いるような時間はないだろう。

絶対に今日中に届けなくちゃいけないという規則があるわけでもないし、実際、やむを得ない事情によって配達が遅れることはある。でも、郵便配達は時間厳守も重要と言われている。……すでに遅れているわけだけだ。

それ以前に、届ける側としては、やっぱり配達予定だった手紙は予定日のうちに届けたい。

手紙が届けられるのを楽しみに待つてる人がいるかもしれないのだから。

「こんな姿だけど、行くしかないよね……？」

「うん、そうね……。仕方がないわよね。届けないと職務放棄だし。……実習中のお手伝いの身ではあるけど」

わたしがほゆるちゃんに同意を求めると、彼女は素直に頷いてくれた。

風を切ってホウキを進ませながら、わたしは泥まみれになった手紙に目を向けてみる。

この感じだと、封筒は泥だらけで文字も見えなくなっちゃってるけど、中の手紙にまでは被害が及んでないかもしれない。

とはいえ、それは開けてみないとわからない。

だけど、郵便物を勝手に開けるわけにもいかず……。

ここは配達先の人に謝って手渡しするしかない。

こんな泥だらけの女の子ふたりが突然現れたら、さすがにびっくりしちゃうかな……？

そうは思ったものの、だからといってポストに泥まみれの手紙を

入れて、配達完了！　なんてことができるはずもない。
謝ったって、許してもらえるかどうかかわからないけど。

でも、こんな泥まみれの郵便物が黙ってポストに入れられていたら、絶対に怒るだろう。

少なくとも、わたしだったら怒る。郵便局にクレームの電話が入るのも、ほぼ確定だ。

悪いのはこっちなのだから、誠意は見せないで。いくらお手伝いしているだけの立場だとしても。

「だけど、なんか震えてきちゃう……。あ……。ほゆるちゃんも、震えてるね……」

「か……。風が冷たくなってきたからよ！　ともかく、さっさと行くわよ！」

「うんっ！」

泥まみれのわたしたちは、泥まみれの郵便物を持って、泥沼のような腐敗大地のすぐそばにある配達先の家へ、ホウキの柄を向けた。

「申し訳ありませんでしたっ！」

ペコリ。

大きく頭を下げるわたしとほゆるちゃん。

目の前には、配達先の家に住む女性。

震える手でチャームを押すと、玄関のドアを開けて出てきたのは、

手紙の宛名に書かれてあった本人だった。

女性は泥まみれの訪問客に目を見開いていた。

そんな彼女に向かって、わたしたちの口からは真つ先に、謝罪の言葉が飛び出していった。

「……いいんですよ。そんなに汚れてしまつてまで届けてくれて、ありがとございます。……うん、中身は大丈夫みたいですから、頭を上げてください」

女性はそう言って、わたしたちに優しく微笑みかけてくれた。

それどころか、もしよかったらお風呂に入つていきますか？ とまで言ってくれて……。

だけど、さすがにそこまでお世話になるわけにはいかないだろう。だいたい、すでにかなり遅い時間になっていたから、早く郵便局に戻らないと心配されてしまつかもしれないし。

わたしたちは彼女の申し出を丁重にお断りすると、もう一度、誠意を込めて謝罪の言葉とともに頭を下げる。

「ほんとに、いいですよ、そんなに謝つていただかなくても。こんなところに住んでいるこちらのせいとも言えるんですから。腐敗大地に落ちてしまわれたんでしょ？」

「あ……いえ、このたびは、完全にこちらのミスでしたので……」

「ふふ。子供たち、この手紙が届くのを楽しみにしてるんですよ。毎月必ず、遠くに住んでいるおじいちゃんとおばあちゃんから手紙が来るんです。うちは子たくさんなもので、余裕もないからこんな腐敗大地のそばの土地にしか住めないし、なかなか会いにも行けないんです。でも、こうやって手紙を通じて触れ合えるのが、子供たちはとても嬉しいみたい」

本当に感謝しているんですよ。だから、気にしないでください。
女性はそう言って笑った。

あまり長く居座っても悪いし、わたしたちは丁寧にもう一度だけ
頭を下げ、彼女に別れを告げる。

そして、まだ泥まみれのままの姿で再びホウキに腰を下ろし、郵
便局へと向かって飛び立った。

空はすっかり暗くなっていた。

定時はとうに過ぎている。

でも郵便局には、煌々と明かりが灯っていた。

まだ残業している人も多いに違いない。

泥で汚れたままの姿のわたしたちは、あまり人に見られたくもなかったし、静かに庭へと降下していく。

と、すぐさま声がかげられた。

「遅かったな」

ホウキから床に降り立ったわたしたちが声のほうに顔を向けると、そこにいたのは桜華さんだった。

いつもなら定時になるとすぐに帰ってしまうみたいなのに……。

やっぱりわたしたちが心配で……？

それとも、仮にも指導を任されていた身だから、仕方なくなのかな……？

チラリと視線を向けても、桜華さんの表情からはうかがい知ることとはできなかつた。

「桜華さん……」

うつむき加減に名前をつぶやくものの、それ以上言葉が続かない。わたしのすぐ横では、ほゆるちゃんも縮こまって黙ったまま立っていた。

泥だらけのわたしたち。

その姿を見ても、とくに驚いた様子もなく、彼女は淡々とした声で尋ねてきた。

「なにがあつた？」

怒られるだろうな。

そうは思つたけど、わたしたちが悪いのは確かだ。

まだ素人であるわたしたちふたりで配達に行かせた桜華さんにも、責任が及んでしまうかもしれないけど。

それでも、風に取り取られて油断した隙に、鳥さんに手紙を奪われてしまったのは、紛れもなくわたしのミス。

覚悟を決めて、わたしは正直にすべてを話すことにした。

それを、ただ黙って聞いている桜華さん。

たまに頷く程度で、言葉を挟むことも相づちを打つこともなく、ただわたしの目を見据えて話を聞いていた。

怒りに震えるような表情ではない。それどころか、拍子抜けするほどに落ち着き払つた顔だった。

爆発するのは話し終えた瞬間になるのかな……？

それまでパワーを存分に溜めてるのかな……？

なんて考え、冷や汗を垂らしながら話し続けた。

もちろんわたしだけではなく、ほゆるちゃんも説明の言葉を添える。ふたりで補い合いながら、状況を詳しく説明していった。

そしてすべてを話し終えたあと。

覚悟を決め、身を硬くして怒鳴り声を受け止める構えに入っていたわたしの耳に届いたのは、桜華さんのこんな言葉だった。

「ま、相手もいいと言ってるみたいだし、べつにいいんじゃないか？」

え？

あまりにあっさりとした返しに、目を丸くする。
ほゆるちゃんなんて、驚きすぎて逆に激しく怒鳴り返していた。

「い……いいんですか！？ 配達リストのミスもありましたけど、あたしたちのミスだったのは確かですよ！？ それに借りてる制服だって、こんなに汚してしまっ……！」

「配達先の人がいいと言うのなら、こつちが気にすることはなにもないだろう？ それに、制服なんて洗濯すれば済む。オレが洗濯するわけでもないしな。明日までに乾かないかもしれないが、ま、代わりの制服なら他にもあるだろう」

ツバを飛ばしながら詰め寄るほゆるちゃんに対しても、桜華さんはやっぱり淡々とした答えを返すだけだった。

「そんなことより、早く着替えてこい。そのあと、撫子さんのところへ行くぞ」

わたしたちは郵便局の建物に入り、更衣室で自分の服に着替える。汚れた制服は、他にも洗濯物が投げ込まれているカゴの横に、とりあえずたたんで置いておいた。

「泥まみれにしてしまって、すみませんでした。お洗濯、よろしくお願ひ致します。風間夢愛」と書いた紙を添えて。

着替えを終えたわたしとほゆるちゃんは、桜華さんに先導されて局長室へと向かう。

そこには、撫子さんだけでなく、現くんも待っていた。

「あなた方の帰りを待つあいだ、話し相手になってもらっただけです。」「

撫子さんはそう言って、いつもどおりの微笑みを見せる。

「ただ桜華さんがわたしたちのことを報告したら、こっぴどく叱られるんだろうな。」

わたしは覚悟を決めていた。

それなのに、

「あらあら、大変でしたわね。遅くまで、ご苦労様でした。」

撫子さんは怒るところか、労いの言葉をかけてくれた。

「……撫子さん！」

「はいはい、わかっておりますわ。これでは示しがつかないというのでしょう？」

桜華さんからの責められるような声を受け、撫子さんはわたしとほゆるちゃんに向き直った。

そして局長席から立ち上がると、わたしたちのほうへ、じわりじわりと歩み寄る。

今度こそ、撫子さんの雷が落とされるんだ。
再び覚悟を決め、目をつぶって待ち受ける。

と。

「……メッ！」

こっぴど。

撫子さんは軽く握ったこぶしで、わたしとほゆるちゃんの頭を一回ずつ叩き、乾いた音を響かせる。

彼女の雷は、たったそれだけで鳴り止んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9803x/>

YUMA（ゆーま）を目指して

2011年10月28日20時03分発行